



平成 26 年度文部科学省
大学教育再生加速プログラム (AP)
(テーマ1: アクティブ・ラーニング) 採択事業

福岡工業大学 AL型授業推進プログラム 事業報告書

平成26年度～令和元年度

福岡工業大学 AL 型授業推進プログラム 事業報告書

平成26年度～令和元年度

平成26年度文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）
（テーマⅠ：アクティブ・ラーニング）採択事業

福岡工業大学

AL 型授業推進プログラム

事業報告書

目 次

第1章 事業全体の概要	5
1. AL 型授業推進プログラムの概要と目的	6
2. AL 型授業の定義	6
3. 事業実施計画と進捗状況	7
3-1 事業実施計画	7
3-2 進捗状況	8
(1) 第1フェーズ 条件整備（平成26年度～27年度）	8
(2) 第2フェーズ 全学展開（平成28年度～29年度）	9
(3) 第3フェーズ 評価・改善（平成30年度～令和元年度）	10
第2章 取組概要	11
1. 教職協働による AL 型授業推進体制の構築	12
1-1 教職協働から教職「学」協働の実施体制へ	12
1-2 FDer（ファカルティ・ディベロップター）の育成と認定	13
2. アセスメント・ポリシーの策定	14
3. AL 型授業実施のための教授・学習環境の整備	15
3-1 AL 対応教室の整備	15
3-2 授業アーカイブシステムの導入と活用	15
4. AL 実践事例の調査研究と共有	17
4-1 他大学事例の視察	17
4-2 AL をテーマにした講演会・報告会の開催	18
(1) AL 実践研究会	18
(2) FD 研修会（FD Café）	19
(3) 新任教員 FD 研修会	19
5. CS（クラス・サポーター）の育成と活動	20
5-1 CS の雇用	20
5-2 CS の研修プログラム	22
(1) CS 合宿	22
(2) 後期 CS 研修	23
5-3 CS の追跡調査	24

5-4 学生による授業改善活動（学生 FD スタッフ「FIT-join」）	25
6. 学習ポートフォリオの開発と導入、活用	27
6-1 学習ポートフォリオの開発と導入	27
6-2 学習ポートフォリオの活用状況	29
(1) 入力件数（「授業の振り返り」）	29
(2) 授業での活用事例	29
(3) 活用の効果	30
6-3 学生の自己調整学習支援	30
6-4 アセスメント・ポリシーに基づく教育点検活動への活用	31

第3章 取組の成果 33

1. テーマにおける必須指標と事業目標に対する達成度	34
2. 成果の測定項目とその分析結果	36
2-1 AL の伸展に伴う成果の測定項目	36
2-2 AL 実施状況と経年変化	37
3. 点検・成果公表	38
3-1 学生調査からみる事業の成果	38
(1) 授業アンケート	38
(2) IR コンソーシアム在学生調査	38
3-2 卒業生調査からみる事業成果	41
(1) 卒業生に対するアンケート調査	42
(2) 入社企業への聞き取り調査	43
3-3 評価委員会の実施	45
3-4 外部への公表	46
4. 今後の課題	46

第4章 資料 49

1. 取組広報（令和元年度分）資料	50
2. 教育技術開発 WG 活動録（令和元年度分）	51
3. AL テーマ報告会（令和元年度分）	53

1

事業全体の概要

事業全体の概要

1. AL 型授業推進プログラムの概要と目的

本事業の全体の目的は、本学の人材育成目標「自律的に考え、行動し、様々な分野で創造性を発揮できるような人材（実践型人材）」を達成するため、学生の「知識の定着」と「能動的な学習態度の涵養」の実現を図ることである。その方法として、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の導入、活用が効果的であるとの知見はキャリア教育充実・強化の活動等のいくつかの試みを通じて学内で共有されてきたが、実践例、ノウハウの共有、効果測定等については十分なものがなく、全学的、組織的な展開には至っていなかった。この主要原因は、これまでの本学の教育改革では「実践型人材」育成のための制度的枠組みの構築に努めながらも、教育現場での具体的、実地的な教授方法を提示しきれていなかったことにある。

そこで、本事業では、教育改革のフレームに「教授方法の質的転換」を加え、その具体的方策として AL 型授業の全学的、組織的な展開を加速的に進めていく。

具体的には、事業期間を通じた実施計画である「AL 型授業推進プログラム」を策定し、AL 型授業の全学展開のため、①教職協働による AL 型授業推進体制の構築、②3つのポリシー改訂、③AL 事例調査・研究、④AL テーマ講演会、報告会、⑤AL 対応「クラス・サポーター」育成、⑥AL 対応教室整備、⑦AL 型授業アーカイブシステム構築、⑧在学生・卒業生アンケート、⑨成果公表の各課題に取り組む。

本事業により、AL 型科目の割合、AL 型科目受講生の割合、AL を行う専任教員の割合のそれぞれを8割まで引き上げる。

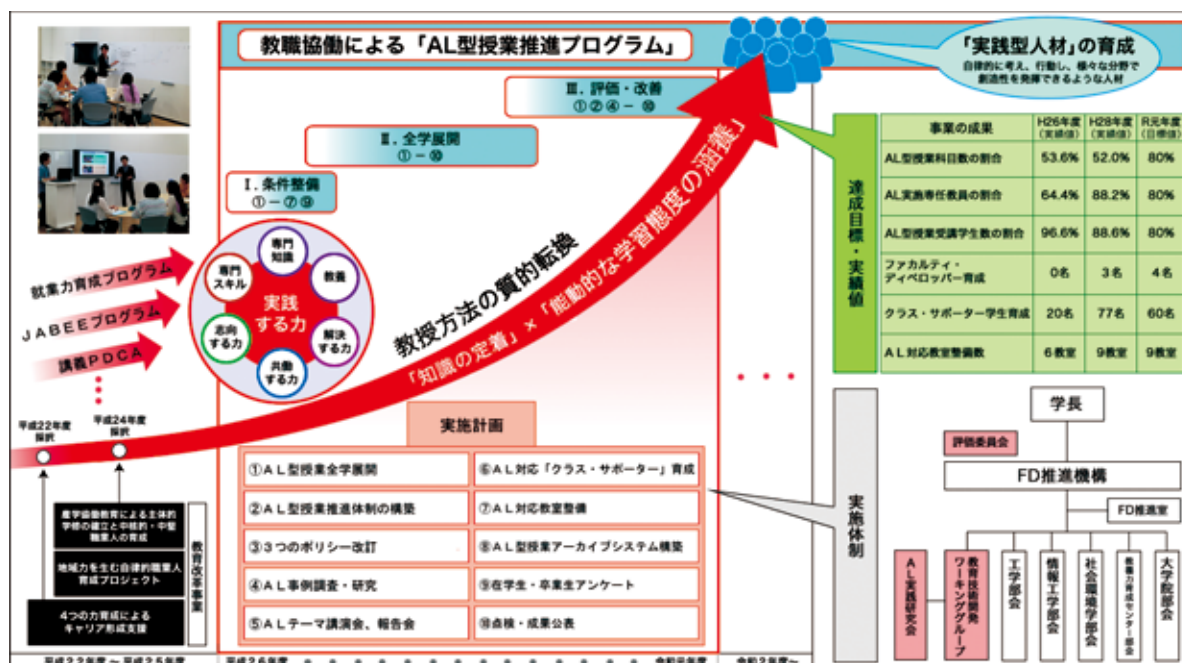
2. AL 型授業の定義

本事業における AL を「学生の知識定着及び能動的な学修態度の涵養を目的として行われる、学生の意見表明及び振り返りを基本的な要素とする授業・学習形態。具体的には、グループ学習、グループディスカッション、体験学習、課題解決学習などを取り入れた授業」として定義し、このような授業を組織的、全学的に展開し、「実践型人材」の育成を図っていく。

3. 事業実施計画と進捗状況

3-1 事業実施計画

本取組にあたって、全事業期間を3つのフェーズに整理し、平成26～27年度である第1フェーズでは物理的な条件整備を、第2フェーズ（平成28～29年度）では全学展開、そして第3フェーズ（平成30～令和元年度）には評価・改善を主要なテーマとして取り組んでいく。



フェーズⅠ（条件整備）		フェーズⅡ（全学展開）		フェーズⅢ（評価・改善）		事業終了後
平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	
①AL型授業全学展開（AL型対応授業／受講学生数／実施専任教員：いずれも80％）						恒常的なFD活動として アクティブ・ラーニング手法の 推進・評価・改善
②AL型授業推進体制の構築（教育技術開発WG開催／FDer育成／AL実践研究会開催）						
③3つのポリシー改訂						
④AL事例調査・研究（年2校）						
⑤ALテーマ講演会、報告会（年2回）						
⑥クラスサポーター育成（事前研修プログラム：計60名育成）／学生FDスタッフ育成						
⑦AL対応教室整備（計9教室）						
⑧授業アーカイブシステム構築						
⑨在学生・卒業生アンケート（成果測定・分析：年1回）／学習成果指標／学習ポートフォリオ						
⑩成果公表 （論文5件、実践報告10件）						
⑩成果公表 （論文5件、成果報告10件）						
⑪評価委員会（年2回）						

継続

3-2 進捗状況

(1) 第1フェーズ 条件整備（平成26年度～27年度）

第1フェーズにあたる平成26年度～27年度の目的は、AL型授業の全学展開の環境を整えていくことであった。教育技術開発ワーキンググループ（以下、教育技術開発WG）を中心に、ALをテーマとした講演会や報告会を開催することによりAL型授業導入に関する心理的障壁の引き下げを図る他、AL対応教室に必要な設備・備品について検討、整備を進めるとともに、クラス・サポーター育成に着手、授業アーカイブシステムの運用開始など、物理的・人的条件整備を行った。

項目	取組概要（平成26年度～27年度）
1. 教職協働によるAL型授業推進体制の構築	・教育技術開発WGの毎月開催 ・ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の育成検討（H27）
2. 3つのポリシー改訂	・ディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）の改訂（H26） ・DP・CPの再検討とアドミッション・ポリシー（AP）の改訂審議（H27）
3. AL事例調査・研究	・他大学の先行事例の訪問調査（H26：3校、H27：3校）
4. AL講演会・報告会	・ALをテーマとしたFD研修会の開催（H26：3回、H27：3回） ・AL実践研究会の発足（H27）
5. クラス・サポーターの育成	・クラス・サポーター（CS）の試行（H26）、導入（H27） ・CS育成プログラムの開発（H27）
6. AL対応教室の整備	・AL対応教室の整備（H26：3教室、H27：1教室）
7. 授業アーカイブシステムの活用	・授業アーカイブシステムの導入（H27） ・授業アーカイブをテーマとしたFD研修会の実施（H27）
8. 学習成果指標の策定（在学生・卒業生アンケート）	・成果指標の策定（H26） ・AL導入科目実施状況調査実施、アンケートシステムの整備 ・ジェネリックスキルの測定（H27） ・在学生アンケート調査実施（H27）
9. 成果公表	・評価委員会の年2回開催 ・ホームページ、リーフレット、事業報告書の作成・配布

(2) 第2フェーズ 全学展開（平成28年度～平成29年度）

第2フェーズの目的は、AL 型授業の全学展開を具体的に進展させることである。教育技術開発WGを起点として、これまでの取組であるAL 事例調査・研究、AL 講演会・報告会、CS 活用、授業アーカイブシステム活用を進める他、ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の育成・認定を行った。

項目	取組概要（平成28年度～29年度）
1. 教職協働によるAL 型授業推進体制の構築	・教育技術開発 WG の毎月開催 ・ファカルティ・ディベロッパー（FDer）認定（H28: 3名、H29: 2名、計5名） ・AL 実践研究会の開催（H28: 2回、H29: 1回）
2. 3つのポリシー改訂	・アドミッション・ポリシーの改訂（H28）
3. AL 事例調査・研究	・他大学の先行事例の訪問調査（H28: 2校、H29: 3校）
4. AL 講演会・報告会	・AL をテーマとした講演・報告会（H28: 4回、H29: 2回）
5. クラス・サポーターの育成	・CS の雇用とCS 事前研修の実施（H28・H29） ・学生による授業改善活動実施（H29）
6. AL 対応教室の整備	・AL 対応教室の整備（H28: 2教室、H29: なし）
7. 授業アーカイブシステムの活用	・授業アーカイブシステムを活用した反転授業の実施 ・授業アーカイブをテーマとしたFD 研修会実施（H28: 1回、H29: 1回）
8. 学習成果指標の策定	・AL 導入科目実施状況・受講学生数の調査実施 ・ジェネリックスキルの測定（H29）
9. 点検・成果公表	・評価委員会の年2回開催 ・中間成果報告会（H29） ・ホームページの改訂、リーフレット、事業報告書の作成

(3) 第3フェーズ 評価・改善（平成30年度～令和元年度）

第3フェーズでは、それまでの取組をもとに成果を点検・検証し、取組の改善につなげるとともに、事業期間終了後の取組継続に向けた体制を整えた。

本年度（令和元年度）の目的は、AL型授業の全学展開の取組を継続するとともに、本事業のこれまでの取組の成果に関する評価を踏まえ、計画の改善と再整理を行うことであり、具体的には、AL型授業全学展開のための各施策（AL実践研究会を通じたAL授業実践例の蓄積・課題抽出、AL講演会・報告会実施、CSの育成・活用とそのシステム化、授業アーカイブ活用、ファカルティ・ディベロッパーの認定・活用とシステム化）を継続して推進するとともに、特に学生一人当たりのAL科目に関する授業外学修時間の実績値改善、学修成果指標の検討と学習ポートフォリオの運用、人材育成目標の達成を点検・評価する手法の開発等に重点を置いた取組を行った。また、取組の評価・改善については、中間評価および平成30年度・令和元年度フォローアップ報告書における指摘はもとより、それまでの各調査・アンケート結果や評価委員会の指摘を踏まえた検討を行った。

項目	取組概要（平成30年度～令和元年度）
1. 教職協働によるAL型授業推進体制の構築	・教育技術開発WGの毎月開催 ・教職協働から教職「学」協働の実施体制へ ・ファカルティ・ディベロッパー（FDer）認定（H30：1名、R1：1名、計2名） ・ファカルティ・ディベロッパーの認定基準見直し
2. ポリシーの整備	・アセスメント・ポリシーの策定、試行実施
3. 授業アーカイブシステムの活用	・授業アーカイブシステムの活用促進
4. AL事例調査・研究	・他大学の先行事例の訪問調査（H30：1校） ・ALをテーマにした講演会・報告会の開催（H30：2回、R1：2回）
5. クラス・サポーターの育成と活動	・CSの雇用 ・CS事前研修プログラム（合宿研修、後期研修）、CSチェックリスト開発・導入 ・学生による授業改善活動（学生FDスタッフ）
6. 学習ポートフォリオ	・学習ポートフォリオの開発と学生への導入指導 ・学習ポートフォリオの活用促進
7. 学習成果指標の策定	・AL導入科目実施状況・受講学生数の調査実施 ・主体性のルーブリック策定、アセスメント試行実施 ・授業外学修時間実績値改善に向けた取組
8. 点検・成果公表	・「評価委員会」を年度内に2回開催 ・在学生調査（アンケート）の実施 ・卒業生調査（卒業生アンケート、企業ヒアリング）の実施 ・ホームページの改訂、リーフレット、事業報告書の作成

第 2 章

取組概要

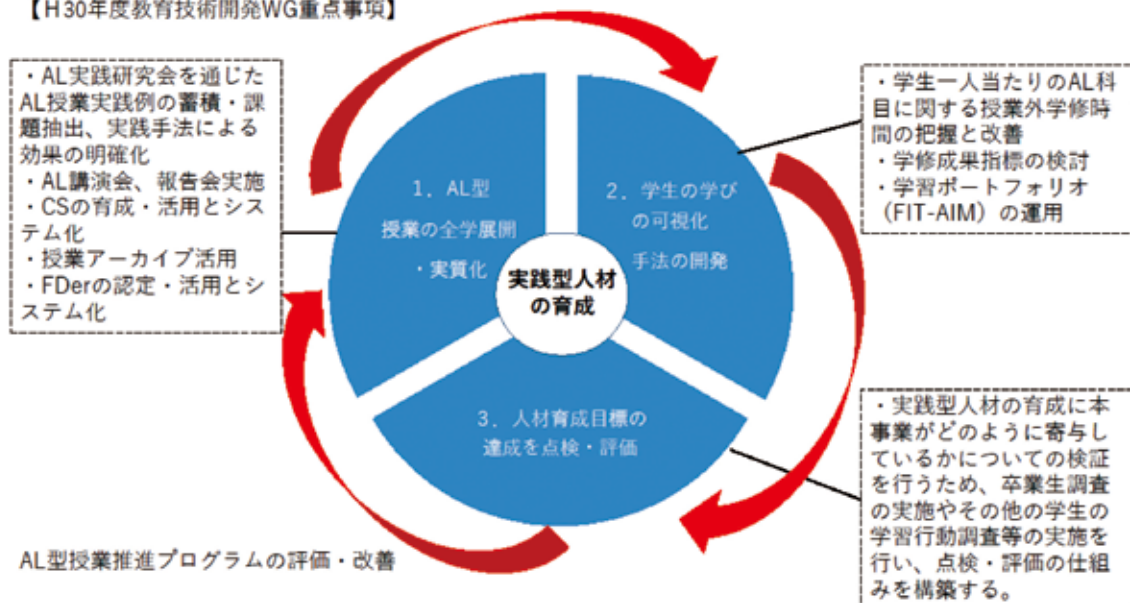
取組概要

1. 教職協働による AL 型授業推進体制の構築

1-1 教職協働から教職「学」協働の実施体制へ

平成26年10月、FD 推進機構のもとに教職協働組織である教育技術開発 WG が設置され、以降、AL 導入促進の主体として、FD 推進機構各部会から報告される実施状況・成果の分析、学内講習会開催、事例調査・視察の計画や振り返りを行い、FD 推進機構運営委員会で報告を行うとともに、得た知見を学内に水平展開することを目的に活動を行った。しかしながら、AL 導入のさらなる進展のために、実際に授業を実施する教員間における授業実践例ならびにその成果についての情報共有や、授業実施上の課題に関する連絡協議の場が必要であるとの認識を持つに至り、平成27年2月、授業実施者による「AL 実践研究会」を、教育技術開発 WG 下に設置し、実践例の蓄積と課題の抽出を行うこととした。また、平成28年度より、WG 構成員の見直しを行い、各学部委員を各部会長（学部長）に変更するとともに、授業実施代表者として学部代表4名を加え、授業実施者と推進組織との密なる連携を図るものとした。また、平成29年度からは、教職「学」協働の実施体制への移行を目指し、学生 FD スタッフの会議への参画を開始、平成30年度は、学生 FD の活動報告として学生 FD スタッフ3名が会議に参加（平成30年10月30日）、独自に行ったアンケート結果から、本学学生が自らの学習意欲を喚起する授業方法は、「体験」できる AL 型授業であると感じていること、学習内容に関する科目間の繋がり の例示、具体的に学んでいる内容がどのような実用性を持つものかについての説明も有効であると感じていることなどが報告され、これについて、教職員と学

【H30年度教育技術開発WG重点事項】



生での意見交換を行った。また令和元年度は、学生 FD スタッフ 2 名が会議に参加（令和元年10月29日）、学生が学びたいと思う内容について学生目線で授業をデザインし、学生の能動的な学びの意欲に応えるとともに、福工大の「学びのコミュニティ」の礎を築くことを目的に企画・運営した学生発案型授業「Join → connect」（同10月9日）の実施報告を行い、これについて、教職員と学生での意見交換を行った。

また、中間評価および平成30年度・令和元年度フォローアップ報告書における指摘を踏まえ、教育技術開発 WG の重点事項を定め（平成30年度、令和元年度）、取組の方向性を、実質化・可視化・点検評価の3つに整理し、改善のサイクルを回しながら推進していく体制を整えた。

1-2 FDer（ファカルティ・ディベロッパー）の育成と認定

本事業では、AL 型授業に先駆的に取組む教員を「ファカルティ・ディベロッパー（以下、FDer）」と位置づけ、AL の全学展開をリードし、本学の教授法の質的転換の実現の先導役となることを期待役割として認定する取組を行っており、計 7 名（H28：3 名、H29：2 名、H30：1 名、R1：1 名）を認定した。



R2/1/15認定証交付式

FDer の役割は、新たに AL に取り組む教員の動機づけとなり、第2フェーズである全学展開の局面において、その存在は大きなものとなった。本学における FDer の認定要件は「AL 型授業を先導的に実践し、その知見を一般化、体系化して共有、展開することができる者」・「本学の教育改善に資する指定された2つ以上の研修を修了した者、または同等以上の能力を有する者」・「自らの教育力を高めるとともに、本学の教員や組織の教育力を高める継続的な支援の経験を有する者」の3つの要件をすべて満たした教職員を認定するものとし、活動については年間10万円の予算措置を行っている。要件の一つとしている「教育力向上の支援」については、学内で実施する AL テーマ講演会、報告会において自身の実践事例を報告する以外にも、参加した研修プログラムでの知見を活かし、新任教員 FD 研修会など、学内研修会におけるファシリテーター役を務めることや、学生の学修成果に係るデータを AL の効果検証のために分析するといった内容が含まれている。FDer の活動の拡がりは、本学における FD・SD 活動の進展につながるものとなっており、今後は認定基準に教育改革への貢献度評価を含む方向で見直しを行い、教員の動機づけを強めていく計画である。

平成30年度は認定基準見直しの一部として、認定要件や業務・役割等についてこれまでの申し合わせをより具体化する議論が行われた。新たな認定要件では「具体的活動」を明示し、FDer 認定対象者が職務にふさわしい経験、意欲、知識を有しているかが判断できるものとするとともに、その業務、役割についても明確化を図った。さらに、学内における教育活動上の実績として明確化するため、学内で実施している「業績評価加点項目（表）」の新規加点項目として位置づけし、教員の業績として明確に組み入れることについて議論を始めている。また、令和元年度は FDer ミーティングを開催し、本事業の現状と課題、授業外学修時間実績値改善、主体性評価、今期の研修会のテーマ、今後の AL 全学展開等についての意見交換を行った。

【福岡工業大学における FDer 認定要件】 H30/10/30教育技術開発 WG

実施要件	実施のレベル	具体的活動	必要数
AL実践	AL型授業を先導的に実践し、その知見を一般化、体系化して共有、展開することができる	AL型授業の2年継続実施	2つ以上
		FD7コミュニティ、教育関連論文の投稿実績	
		自身のAL型授業の公開歴あり	
		ACCWG委員を1年以上歴任	
FD研修	本学が認める教育改善に資する2つ以上の研修を修了、または同等以上の能力を有する	※同等以上の能力	-
		教育学、教育工学等の知見（ACC WG長判断）	
教育支援	自らの教育力を高めるとともに、本学の教員や組織の教育力を高める継続的な支援の経験を有する	学内でのFD研修会に2年継続して2回以上参加	2つ以上
		FD推進室後援の学外FD研修に3年以内に参加歴あり	
		学内での研修で3年以内に講師経験あり	
		学部（教養力育成センター）FD委員経験3年以内にあり	

【FDer の業務・役割】 H30/10/30教育技術開発 WG

区分	実施内容	具体的活動	意義・目的	
AL実践	公開授業	-	さらに改善した授業内容を広く知らしめる	◎
	執筆・投稿	FD7コミュニティ、その他論文集など	実施事例や改善内容などを分析的に伝える	任意
教育支援	企画・開発	FDerミーティング（各期1回 年2回）	現状のFD活動（特にAL実践）についての現状を確認し、課題抽出や改善策の提案を行う 全学でのFD研修のテーマ、内容の決定や自らを含め講師・ファシリテーターの選定を行う	◎
	研修講師・ファシリテーター	AL実践研究会（年2回）	本学でのALの実践事例や効果ある実施方法、ツールなどについて講義やWSを実施	就任後2年まで年1回以上
		FDcafé（年2回以上）	ALに限定せず、授業改善、教育改善に関して講義や実践型のWSを実施	
		新任教員FD研修会（年2回）	ALの実践をテーマとしてWSを指導、期末のフォロー研修も主導	
		非常勤講師オリエンテーション（年2回）	プログラム内WSにてAL推進や本学の教育改善法などについてファシリテート	
		学部FD研修会・講演会	学部FD部会と連動して、学部ニーズに沿った講演・研修会を企画、主導	学部委任
		SD研修会	現在の高等教育の動向と本学の取組み、ALの進展などについて職員にも情報共有	1名指名
	コンサルティング	個別教員の要望に対応	個別教員の要請に応じて、授業全般の改善（内容、目的、手法、評価）などを指導	任意
その他	学外対応	来訪者対応	本学のALの取組みについての調査来訪者（他大学、企業・団体など）への対応	随時
	学生指導	クラス・サポーター（CS）指導	CS合宿・研修に主管教員と同行、特に専門科目についての考え方やファシリテーション法を指導	毎回1名
		FIT-JOIN指導	FIT-JOINの活動状況を定期的に聴取、活動の方向性などをアドバイス	1名主管
FD研修	学外研修受講		FDerとして必要な最新知識や知見を修得するために本人希望ないしFD推進機構指定研修に派遣	1～2名指名

2. アセスメント・ポリシーの策定

これまでの取組の中で、本学では、3つのポリシーに基づく教学マネジメントの確立とALの全学展開による教育の質的転換の取組を推進してきた。特にディプロマ・ポリシー（以下DP）及びカリキュラム・ポリシー（以下CP）については、体系的で組織的な教育を実施するための目標や評価（アセスメント）基準として機能すべく要請されていることから、本学でもその視点で見直しや確認を行い、各学科のカリキュラム・ポリシーに「学修成果の評価の在り方」について記載を加えるなどの改訂を行った（平成29年4月実施）。しかしながら、本学がこれらのポリシーに基づいて、「質保証」に向けたPDCAサイクルをより適切に機能させるためには、個々の学生の学修成果

や教育プログラム全体の教育成果を可視化し、全学共通の考え方や尺度によって評価し、その結果を改善につなげる必要がある。そこで、成績評価を含む個々の学生の学修成果を測るものから教育プログラム単位で DP の達成を測るものまでの全学共通の評価の考え方を、本学のアセスメント・ポリシーとして明確化し、さらなる教育の質向上に資するものとするため、全学的な検討を行い、平成31年4月に制定、公表、それに照らした評価を試行的に実施することとなった。また、アセスメント・ポリシーとともに、「成績評価ガイドライン」を策定、成績評価の基準を統一することで、評価の客観性と適切性を担保し、教育の質保証を図ることとした。同ガイドラインには、DP を知識・能力・態度といった性質ごとにカテゴリ化し、それぞれに対応する達成目標を評価するための課題と評価の方法を例示するとともに、特に本取組で育成しようとする「能動的学習態度（主体性）」をルーブリックとして示し、評価の参照とした。これらの内容は本事業での取組成果が活かされたものであり、本学の人材育成目標の達成に向けて、本事業が寄与する点であるといえる。

3. AL 型授業実施のための教授・学習環境の整備

3-1 AL 対応教室の整備

本学では第Ⅲ期施設・設備整備計画において、AL の拡大、情報処理・情報編集技術の高度化、ラーニングコモンスの学習機能向上等を主要な目的とし、次世代の大学の使命に応えるためにキャンパス全域の革新を図った。本取組ではそれに連動して、主に第1フェーズにおいて、既存の教室（計6教室）の一部を AL 対応教室として改修し、グループワークやディスカッションに適した環境を整え、動きやすいスペースを確保し、本取組の成果向上に繋げるものとした。

3-2 授業アーカイブシステムの導入と活用

本取組では、第1フェーズである平成27年度後期から授業アーカイブシステムを導入し、学生の振り返り学習や反転授業の事前学習としての利用、およびモデル授業の FD 研修コンテンツとしての活用を行ってきた。また、本システムにより蓄積された AL 型授業の手法を素材として FD 研修会を行い、AL 型授業のノウハウ獲得の機会とした。

【授業アーカイブ画面例】



【授業アーカイブ利用実績】

	H27実績	H28実績		H29実績		H30実績		R1実績	
	後期	前期	後期※	前期	後期	前期	後期	前期	後期
授業アーカイブシステム利用 学生数（実数）	562	640	563	783	397	1,059	560	1,078	765
復習（振り返り）学生数	464	334	368	510	340	766	420	655	581
事前学習（反転学習）学生数	238	512	312	475	253	607	382	723	425
授業アーカイブシステム利用 授業数（コマ数、科目数）	153、20	123、15	89、21	164、18	75、15	212、21	100、15	205、21	116、16
うち、復習もしくは事前学習利用 授業数（コマ数、科目数）	151、16	122、14	83、16	163、17	69、11	210、19	96、13	203、19	113、15
復習（振り返り）用	129、14	85、12	45、13	109、13	46、10	141、15	56、10	129、14	78、12
事前学習（反転学習）用	22、2	49、5	38、3	73、7	34、3	120、10	51、5	112、10	73、7
授業アーカイブシステム利用 平均視聴時間総合（hh:mm）	5:19	3:20	3:05	3:38	3:32	4:13	4:24	3:27	3:34
復習（振り返り）用	5:22	2:52	1:24	4:03	2:22	2:45	2:22	2:52	2:03
事前学習（反転学習）用	4:53	3:47	4:46	3:12	4:43	5:41	6:27	4:02	5:05

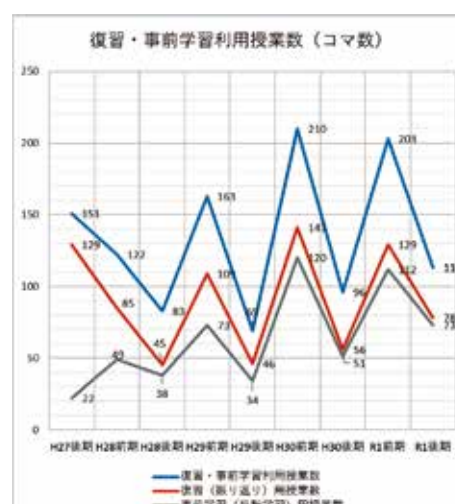
※平成27実績は後期のみ

利用状況を見ると、振り返り学習 + 反転学習者（R1前期実数1,078名、後期実数765名）、平均視聴時間総合（同前期3時間27分、後期3時間34分）、学生一人当たり平均視聴時間（同前期5時間26分、後期7時間1分）という状況であり、試験が近い期間に視聴率が伸びる傾向があった。反転学習用にはパワーポイントなどのPC画面をキャプチャーした資料、振り返り用には板書の映像資料などの利用例が多くあり、資料作成方法や動画時間など先生方の創意工夫が見受けられる。また、経年での利用状況を確認したところ、後期に比して前期の利用が多い傾向にあること、振り返り学習に比して反転学習の利用平均視聴時間が長い傾向にあることが確認される他、利用平均視聴時間は減少が見られ、これは反転学習の視聴時間の減少が主な要因であるが、コンテンツが精査され凝縮されているのが背景の一つと考えられる。

【授業アーカイブシステム利用学生数（実数）】



【復習・事前学習利用授業数（コマ数）】



【利用平均視聴時間】



4. AL 実践事例の調査研究と共有

4-1 他大学事例の視察

本取組では、AL の実施環境や教育方法、AL の成果を測る具体的方法や指標について把握することにより、本学における AL 全学展開に資するため、AL に関する優れた先行事例を有する国内の大学に訪問調査を行ってきた。また第3フェーズでは、特に事業成果をどのように点検・評価するかという視点を踏まえるため、学修成果の可視化方策の検討イメージを得ることを目的として、訪問調査を行った。

【事例調査の実績】

年度	大学名	日程	視察の視点	訪問者
H26	創価大学	H26/12/18 ～12/19	LTD 学習法を活用した反転授業や学修支援について	教職員 8 名
	山梨大学		工学領域における反転習得型学習のための反転授業の取組について	
	長崎大学	H27/3/6	経営系科目での AL 導入について	教職員 10 名
H27	玉川大学	H28/1/14	AL の体系化と効果測定	教職員 6 名
	山口大学	H28/1/28	共通教育を中心とした AL の推進	教職員 7 名
	名城大学	H28/2/23	教養科目大人数講義での AL	教職員 7 名
H28	金沢大学	H28/12/15	学修ポートフォリオの活用、学生バックアップポリシー策定、授業カタログ等について	教職員 6 名
	金沢工業大学		e シラバスを通した正課と課外の接続、ポートフォリオによる学生の振り返りと指導	
H29	芝浦工業大学	H29/10/26 ～10/27	SCOT 研修の視察、学生・教職員との意見交換	職員 2 名 学生 3 名
	帝京大学		SCOT 活動について	
	東洋大学		学生 FD の活動について	
H30	宇都宮大学	H30/11/29	AL の深化・拡充、学習成果の可視化	職員 1 名

4-2 AL をテーマにした講演会・報告会の開催

(1) AL 実践研究会

本取組では、随時 AL をテーマとした講演会・報告会を開催し、学内教職員を対象に AL に関する授業実践例ならびにその成果についての情報共有や、授業実施上の課題に関する協議の場として授業実施者による実践例の報告と課題の抽出を行っている。(本年度実績の内容の詳細は、「第4章 資料」を参照)

【AL 実践研究会開催実績】

年度	開催日	テーマ	参加者
H27	H28/3/10	授業実践事例報告 報告者：電気工学科 松尾敬二 教授 (H28～ FDer) 情報システム工学科 徳安達士 教授 (H28～ FDer)	教職員51名
H28	H28/8/25	「動画やクリッカーを利用した講義～反転講義・振り返り～」 事例発表者：電気工学科 北川二郎 教授 ファシリテーター：電子情報工学科 松木裕二 教授 (H29～ FDer)	教職員35名
	H29/1/27	「ピアで創る AL 型講義」 ファシリテーター：システムマネジメント学科 藤岡寛之 教授 (H28～ FDer)	教職員26名
H29	H30/3/5	「アーカイブシステムを使った授業の工夫と効果」 事例発表者：電子情報工学科 松木裕二 教授 (H29～ FDer)	教職員25名
	H30/3/22	「ポートフォリオと自己調整学習」 事例発表者：システムマネジメント学科 藤岡寛之 教授 (H28～ FDer)	教職員30名
H30	H31/2/25	「教養力育成科目における AL 実践とその効果」 事例発表者：社会環境学科 中野美香 准教授 社会環境学科 樋口貴俊 助教 他	教職員32名
	H31/3/4	「新任教員ピア授業参観振り返り」 ファシリテーター：社会環境学科 藤井洋次 教授 (H29～ FDer) 報告者：電気工学科 松尾敬二 教授 (H28～ FDer)	教職員15名
R1	R1/12/18	「FIT-AIM の活用事例～振り返りを用いた学生の主体性評価と講義改善～」 事例発表者：電気工学科 北崎 訓 助教	教職員43名
	R2/2/21	「アイスブレイキングとチームビルディング」 報告者：社会環境学科 植崎兼司 教授	教職員21名



(2) FD 研修会 (FD Café)

FD 研修会 (FD Café) では、外部有識者 (大学教育関係者を問わず) を招聘し、外部の知見を取り入れて教職員の AL に対する理解を深めている。本年度は、主に学修成果の評価に関するテーマを取り上げて開催した (内容の詳細は「参考資料」FD Café を参照)。また、昨年度からは、学生と授業改善をテーマにした教職員の意見交換会についても FD café として企画を行っている。(本年度実績の内容の詳細は、「第4章 資料」を参照)

【FD 研修会 (FD Café) 開催実績】

年度	開催日	テーマ	参加者
H26	H26/10/15	「大学教育再生加速プログラムの採択にあたって」 説明者：情報通信工学科 前田洋 教授	教職員86名
	H26/11/20	「AL の設計と導入の課題～河合塾全国調査から見えてきたこと～」 講師：学校法人河合塾 谷口哲也 氏	教職員36名
	H27/2/18	「AL 事例視察報告～反転学習の取組から見えてきたもの～」 報告者：情報通信工学科 前田洋 教授 システムマネジメント学科 藤岡寛之 教授 (H28～ FDer) 社会環境学科 大石太郎 助教	教職員52名 学生他4名
H27	H27/7/30	「AL の可能性を探る」 講師：山梨大学 森澤正之 教授	教職員62名 学生他1名
	H27/10/23	「AL ～新しい教育法の試み～」 事例発表者：電気工学科 松尾敬二 教授 (H28～ FDer) 情報システム工学科 徳安達士 教授 (H28～ FDer)	教職員33名
H28	H28/12/2	「高大接続教育の行方～これからの大学での学びを考える」 講師：福岡県立大学 学長 柴田洋三郎 教授 学校法人河合塾 中島由起子 氏	教職員35名
	H29/2/17	「主体的・対話的で深い学びを実現する AL 型授業のコツ～物理科目を例に～」 講師：産業能率大学 小林昭文 教授	教職員45名
H29	H29/9/15	「AL について話をしよう！」 ファシリテーター：社会環境学科 土屋麻衣子 教授 (H30～ FDer)	教職員16名 学生11名
H30	H30/6/18	「授業外の学修について話をしよう～教職員 & 学生懇話会～」 ファシリテーター：情報工学科 山澤一誠 教授	教職員21名 学生8名
	H30/10/12	「ルーブリックを活用した学修評価～主体性の育成に着目して～」 講師：芝浦工業大学 榊原暢久 教授	教職員28名
	H30/12/17	「成績評価の客観性および厳格化について～ガイドラインとアセスメント・ポリシーの策定～」 講師：筑波大学 田中正弘 准教授	教職員28名
R1	R1/6/18	「自主性・自己調整学習を促すフィードバック実践」 講師：社会環境学科 土屋麻衣子 教授 (R1～ FDer)	教職員39名
	R1/10/12	「チームで取り組むカリキュラムマネジメント」 講師：学びと成長しくみデザイン研究所 桑木康宏 氏	教職員23名

(3) 新任教員 FD 研修会

着任後3年以内の新任教員を対象に、AL 型授業をはじめとする授業改善に取り組んでもらうことを目的に、グループディスカッション形式により教職員で意見交換を実施している。

【新任教員 FD 研修会開催実績】

年度	開催日	テーマ	参加者
H27	H27/9/15	AL の効果と実際の講義への導入可能性 ファシリテーター：システムマネジメント学科 藤岡寛之 教授 (H28～ FDer)	教職員28名
H28	H28/9/23	AL 実践事例紹介とグループワーク ラーニングパートナーによる相互授業参観 ファシリテーター：システムマネジメント学科 藤岡寛之 教授 (H28～ FDer)	教職員20名
H29	H29/9/28	2018年問題を見据えた AL 全学展開の必要性 ファシリテーター：情報システム工学科 徳安達士 教授 (H28～ FDer)	教職員13名
H30	H30/9/13	1. アクティブ・ラーニング授業事例紹介 事例発表者：社会環境学科 藤井洋次 教授 (H29～ FDer) 2. グループワーク「前期講義を振り返っての気づき」 3. 相互授業参観について	教職員22名
R1	R1/9/17	1. 今後の本学の教育についての意見交換 ファシリテーター：システムマネジメント学科 藤岡寛之 教授 (H28～ FDer) 2. 担当授業の運営に関するプレゼンテーション (授業内容、工夫点、注意点、課題等) 発表者：新任教員3名 3. 相互授業参観について	教職員8名

5. CS (クラス・サポーター) の育成と活動

5-1 CS の雇用

本事業では、AL 導入科目についてクラス・サポーター（以下、CS）と称する先輩学生を雇用し、AL 型授業の効率化を図っている。CS には対象科目の受講経験のある学生のうち優秀な者から、教員を補助し、授業内外における少人数によるグループ学習のファシリテートやピアラーニングを促す知識・技能を一定程度有し、さらには ICT 機器にも習熟した学生を育成、雇用するもので、対象科目の受講学生はもちろん、CS 自身の学習深化にも繋げることを目的としている。第1フェーズにおいては、キャリア教育における AL 型授業での実績をもとに、試行的に課外での学習支援における取組などを含めながら、専門科目での雇用を開始した。第2フェーズにおいては、さらに専門科目での雇用が拡大し、目標値を上回る雇用実績となった。第3フェーズにおいては、雇用科目の定着が進み、継続的な実績の伸びを示している。

【CS 雇用実績】

	H26試行	H27実績	H28実績	H29実績	H30実績	R1実績
CS 導入科目数	8	24 (専門21、教養3)	29 (専門26、教養3)	31 (専門28、教養3)	32 (専門27、教養5)	34 (専門30、教養4)
CS 導入授業数	11	66 (専門36、教養30)	77 (専門45、教養32)	81 (専門49、教養32)	97 (専門53、教養44)	101 (専門57、教養44)
のべCS数 (名)	35	123	140	137	195	207
実CS数 (名) 【目標】	20	72 —	77 【40】	75 【50】	78 【60】	80 【60】

CS の雇用については、導入を希望する教員が「CS 雇用申請書」を提出し、教育技術開発 WG で AL 授業の内容と CS 活動内容を確認のうえ、CS 候補者（原則として導入担当教員が推薦）の

配置を行う。CS 候補者は原則として事前研修「CS 合宿」を受講して授業での活動に臨むこととしている他、活動後には CS に対してアンケートを実施する他、教員にも「CS 雇用報告書」の提出を求めて事後評価を行っている。

R1年度の事後評価において、教員の「CS 雇用報告書」では、CS に期待する役割内容とそれに対する実際の貢献度を確認する設問について、CS を雇用した34科目中33科目で「とても貢献している／ある程度貢献している」と回答している他、「理解遅延者に対する対応に関しては、CS が教員の言葉ではなく、学生の言葉で説明するため、理解が進んでいるように感じた」、「各学生に発生する様々な問題に対して対応することができた」、「毎回の講義において、グループ演習時に教室内を巡回し、内容理解度が低いと思われる個人やグループに対して適切な指導を行った」、「CS による丁寧な図面チェック・指摘が授業アンケートで高評価」、「学習への取組姿勢について発言するなど、先輩としての指導もできていた」といった評価をしており、効果的・効率的な AL の実施に一定の成果が認められている。また、CS アンケートでは、前期93.9%、後期88.0% が CS として期待された役割が明確だったと回答した他、自身の貢献度について前期90.8、後期86.0% の学生が、「とても貢献していた／ある程度貢献していた」と回答している。また、CS 活動を通して得た自身の学びについても、前期89.2%、後期94.0% の CS が、「とてもあった」、「ある程度あった」と回答するなど、CS 自身の学習深化や成長につながっていることが確認された。

【CS の雇用と実施フロー】



受講生の視点から CS 雇用の成果を示すものとして、全科目に実施している授業アンケートにおいて科目の意義を問うた平均評価ポイント（4.0点満点）を全科目と CS 雇用科目の平均値を比較したところ、CS 雇用科目のポイントが高くなっている他、学修時間の平均値も高い傾向にあり、CS が授業のファシリテートやピアラーニングの促進を行うことにより、受講生の学びに良い影響を与えていることが確認できた。

【CS 雇用授業と授業アンケートと平均評価ポイント・平均学習時間】

	評価ポイント平均			学習時間平均		
	CS 雇用授業	CS 雇用授業 (専門科目のみ)	全体	CS 雇用授業	CS 雇用授業 (専門科目のみ)	全体
H28	3.40	3.38	3.30	51	62	52
H29	3.37	3.33	3.32	54	66	55
H30	3.35	3.36	3.35	43	53	56
R1	3.40	3.37	3.37	65	78	64

※授業アンケート実施科目のうち、回答者数が0以外の授業科目

5-2 CS の研修プログラム

(1) CS 合宿

CS の役割は、学内申し合わせにより、「AL 型授業の円滑な運営のためにグループ学習やピアラーニングのファシリテートや助言、ICT 機器操作の補助および資料の整理などの業務補助を行う」と定義づけている。求められる知識・スキル・態度としては「AL への理解」・「ファシリテーターとしての心構え」等であり、例年2～3月に実施する合宿形式の事前研修でそれらの基礎を身に付けた後、科目での活動で実践的に学んでいる。

■参加者：次年度（前・後期）に CS としての活動を予定する学生

■日時：前年度2月下旬～3月下旬（1泊2日）

■目的：①アクティブ・ラーニング（AL）とは何かについて理解する、②CS の仕事内容や求められる役割について理解する、③ファシリテーターとしての心構えを身に付ける

■研修場所：グローバルアリーナ（福岡県宗像市）

■講師：宮本 知加子（FD 推進機構特任教員）

■主要内容：・オリエンテーション

- ・4年生セッション（経験者から後輩へ）
- ・ワークショップ：年度によってテーマを変更（下表参照）
- ・ファシリテーションロールプレイ（場面別実践：①話せない学生がいる②自分ばかり話す学生がいる③雑談ばかり等）
- ・グループディスカッション「ファシリテーターとしての役割」
- ・グループ発表「目指すファシリテーターとは」

【CS 合宿参加者の声】

- ・合宿で行ったロールプレイを実際に役立てることができた。
- ・先輩方の経験談を聞くことで、前もって情報を得て授業に臨むことができた。
- ・理想の CS 像があり、どう行動すればよいか明確だった。
- ・実際に CS 活動を行うために、自分が何を求められているのか理解することができた。

【「CS 合宿」の概要と実績】

年度	日程	参加者数	ワークショップのテーマ
H27	H28/3/17～3/18	38名	専門科目での実践（CS として何をすべきか）
H28	H29/2/27～2/28	45名	「主体性」の共通理解とステップの整理
H29	H30/3/1～3/2	35名	教員と学生のカタリバ
H30	H31/3/14～3/15	29名	CS として必要なサポートやスキルについて（「理想の CS チェックリスト」の作成）

※注：CS 合宿を欠席した CS 候補者については研修内容を収録した授業アーカイブを事前に視聴した上で CS としての活動に入ることを指導している。

平成30年度 CS 合宿では、AL の授業場面における困りごとについて原因分析をした後、CS の具体的サポートについて話し合い、ロールプレイの実践を経て、CS として必要なサポートやスキル（専門知識、態度・姿勢、ファシリテーション力、観察力）に関して文言化した「理想の CS チェックリスト」が作成された。また、同年5月に開催された CS 育成のためのミーティング（対象者：3月の CS 合宿参加者、13名参加）では、学生の実践を踏まえ、より使いやすいものへと「理想の CS チェックリスト」のブラッシュアップが行われ、最終的に、CS としてどのような人材を養成しようとしているのか明文化し、CS 自身の成長の機会でもあることを意識すること、また、CS

学生が自身の成長を確認するツールとして活用し、成長を実感できるようにすることを目的として、7項目からなるチェックリストが作成された。

記入日：2019/ /

CS 活動における振り返りチェックリスト

1 前期の担当科目と担当クラスを教えてください。

担当科目	
担当学科とクラス	

2 前期の CS 活動において、できた「できるようになった」と感じるところにチェックを入れてください。

1 CS の知識を応用し、受講生の理解が深まるようなヒントを出すことができる	☐
2 活動の方向性が合っているかを判断し、必要に応じて修正を促すことができる	☐
3 受講生の気持ちに寄り添い、安心感を与えることができる	☐
4 先生や受講生をよく観察し、それぞれにあった働きかけを行うことができる	☐
5 受講生の卒業となるような発表やアドバイスを察知し、促すことができる	☐
6 授業の進捗状況を確認し、受講生が学習しやすい環境を作ることができる	☐
7 学習者として貢献となる行動をとることができる	☐

3 上記のチェックを入れた（入っていない）理由を教えてください。

4 担当の先生からご褒美をいただき、学生の CS 活動における成長を感じましたか。
上記の学生のチェックリストをその理由を「褒め」になって、コメントください。

ご署名： _____

学連番号： _____ 氏名： _____

(2) 後期 CS 研修

平成30年度からは従来の前期開始時に行っていた合宿研修に加え、活動年度中に CS が一堂に会して活動を振り返り、経験や考えを共有する場として後期開始時にも研修会を実施している。

- 参 加 者：当年度（前・後期）に CS としての活動する学生
- 日 時：9月下旬～10月上旬（後期開始時）
- 目 的：下表参照
- 研修場所：学内
- 講 師：宮本 知加子（FD 推進機構特任教員）
- 主要内容：
 - ・レクチャー
 - ・グループディスカッション
 - ・グループ発表

【後期 CS 研修参加者の声】

- ・CS 同士で情報を共有できたことで、CS としての動き方、働きかけ方を改善することができた。
- ・周りの CS の話を聞いて、もっとレベルアップしたいと思った。
- ・前期の振り返りを周りと共有することによって、多くの人からアドバイスをもらえた。
- ・前期活動を踏まえて CS チェックリストで振り返りができたので、後期で何をすべきかが見えた。

【「後期 CS 研修」の概要と実績】

年度	日程	参加者数	目 的
H30	H30/10/3	34名	①日ごろ感じていることや不安に思っていることを共有し、協働した学びを体験する。 ②ファシリテーターとしての役割を確認し、今後の活動に活かすためのヒントを得る。 ③ CS 活動を通じた自らの学びを振り返り、自己の成長を確認する機会とする。
R1	R1/10/2	29名	① CS としての役割を再確認し、今後の活動に活かすためのヒントを得る。 ② CS 活動を通じた自らの学びを振り返り、自己の成長を確認する機会とする。 ③ CS 経験者と CS 初参加の学生の交流により、経験・知恵を共有しあう。

令和元年度の後期 CS 研修では、前述の「CS チェックリスト」が活用され、担当する AL 型授業をより良くするために CS 自身ができることや、CS 自身の成長などについて振り返り、考えを深める場となった。

5-3 CS の追跡調査

CS 学生について、その活動が CS 自身の学習深化や成長につながっていることを検証するため、追跡調査を実施した。平成27年と29年に本取組で実施した PROG テストの結果では、コンピテンシーにおいては特に親和力や協働力の伸びが顕著であったことから、CS 経験とこれらの伸びに相関関係が期待されることがわかった。また、累積 GPA・進学率・就職率においても CS 経験学生には優位性が見られることが確認された。これらの検証により、CS 経験学生の学習深化と成長が一定程度確認できたといえる。

【PROG テスト結果（CS 経験学生と全体の比較）】

		受験者数	総合	4つの力				処理能力	
				情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理能力	非言語処理能力
2015年 (H27)	C S	4	3.3	2.8	3.5	2.3	3.3	2.3	3.5
	全 体	188	4.0	3.4	3.6	3.5	3.2	3.4	3.3
	差分(CS値-全体値)	-	-0.8	-0.7	-0.1	-1.2	0.1	-1.1	0.2
2017年 (H29日)	C S	3	5.0	3.0	3.7	3.0	4.7	3.3	3.7
	差分(H29-H27)		1.8	0.3	0.2	0.8	1.4	1.1	0.2
	全 体	169	4.5	3.5	3.6	3.5	3.7	3.4	3.6
	差分(H29-H27)		-0.5	0.5	-0.1	0.5	-1.0	0.1	-0.1
	差分(CS値-全体値)	-	0.5	-0.5	0.1	-0.5	1.0	-0.1	0.1

		受験者数	総合	3つの力			9つの要素								
				対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
				対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
2015年 (H27)	C S	4	2.8	3.3	2.8	2.8	3.3	3.0	3.5	3.3	2.5	3.0	2.5	2.3	2.8
	全 体	188	3.1	3.3	3.2	3.4	3.6	3.4	3.0	3.3	3.0	3.4	3.3	3.3	3.4
	差分(CS値-全体値)	-	-0.3	-0.1	-0.4	-0.6	-0.4	-0.4	0.5	0.0	-0.5	-0.4	-0.8	-1.1	-0.6
2017年 (H29)	C S	3	3.7	4.7	4.0	3.0	5.0	5.0	3.7	4.0	4.0	4.0	4.3	2.7	3.0
	差分(H29-H27)		0.9	1.4	1.3	0.3	1.8	2.0	0.2	0.8	1.5	1.0	1.8	0.4	0.3
	全 体	169	2.9	3.1	3.2	3.4	3.2	3.4	3.0	3.1	3.2	3.4	3.3	3.3	3.6
	差分(H29-H27)		-0.2	-0.2	0.0	0.1	-0.5	0.0	0.0	-0.1	0.2	0.1	0.1	0.0	0.2
	差分(CS値-全体値)	-	0.8	1.6	0.8	-0.4	1.8	1.6	0.7	0.9	0.8	0.6	1.0	-0.6	-0.6

【PROG テスト結果（平均点推移）】



また、累積 GPA・進学率・就職率においても CS 経験学生には優位性が見られることが確認された。

【卒業生の累積 GPA・進学率・就職率】

学科	2017(29)年3月卒業生								2018(30)年3月卒業生								2019(31)年3月卒業生							
	卒業生数		累積GPA平均		進学率※1		就職率※2		卒業生数		累積GPA平均		進学率※1		就職率※2		卒業生数		累積GPA平均		進学率※1		就職率※2	
	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体
電子情報工学科	4	82	2.33	2.10	25.0%	6.1%	100.0%	100.0%	5	69	2.75	2.25	40.0%	8.7%	100.0%	100.0%	4	89	2.60	2.03	0.0%	5.6%	100.0%	100.0%
生命環境化学科	1	76	2.58	2.32	0.0%	5.3%	100.0%	100.0%	0	89	-	2.23	-	9.0%	100.0%	100.0%	2	79	2.30	2.11	0.0%	7.6%	100.0%	98.6%
知能機械工学科	5	102	3.18	2.33	40.0%	4.9%	100.0%	100.0%	7	96	2.70	2.27	0.0%	4.2%	100.0%	100.0%	7	109	2.61	2.39	0.0%	11.9%	100.0%	100.0%
電気工学科	0	77	-	1.84	-	5.2%	100.0%	100.0%	0	72	-	1.92	-	12.5%	100.0%	100.0%	3	91	2.45	1.96	0.0%	4.4%	100.0%	100.0%
情報工学科	9	141	3.21	2.48	33.3%	2.8%	100.0%	99.2%	9	158	3.22	2.50	44.4%	5.1%	100.0%	100.0%	7	130	3.28	2.64	0.0%	3.8%	100.0%	100.0%
情報通信工学科	1	87	2.33	2.09	0.0%	8.0%	100.0%	100.0%	8	79	2.79	2.08	37.5%	5.1%	100.0%	100.0%	5	105	3.07	2.20	0.0%	7.6%	100.0%	100.0%
情報システム工学科	21	93	2.45	2.17	23.8%	5.4%	100.0%	98.8%	14	95	2.83	2.47	14.3%	8.4%	100.0%	100.0%	14	103	2.93	2.33	64.3%	16.5%	100.0%	100.0%
システムマネジメント学科	5	70	2.33	2.11	20.0%	2.9%	100.0%	100.0%	3	73	3.32	2.51	0.0%	1.4%	100.0%	100.0%	9	74	2.84	2.39	0.0%	2.7%	100.0%	100.0%
社会環境学科	4	172	3.23	2.16	0.0%	0.6%	100.0%	100.0%	3	184	2.69	2.16	0.0%	0.5%	100.0%	99.4%	5	188	2.97	2.23	0.0%	0.5%	100.0%	99.4%
合計	50	900	2.70	2.20	24.6%	4.1%	100.0%	99.8%	49	915	2.89	2.28	27.4%	5.4%	100.0%	99.9%	56	968	2.76	2.25	16.1%	6.2%	100.0%	99.8%

※1 進学率=進学人数/卒業生数

※2 就職率=就職人数/就職希望者数

5-4 学生による授業改善活動（学生 FD スタッフ「FIT-join」）

本取組では、CS の活動の活発化によって形成されてきた CS コミュニティを活用し、学生が授業を構成する一方の当事者として授業改善に参画するシステムを構築する取組を行ってきた。活動の端緒として、平成27年度から CS 合宿の運営への参画をはじめ、平成28年10月には学内で公募を行い、「学生 FD スタッフ」として発足し、活動を開始した。平成29年12月に団体の名称を「FIT-join（フィットジョイン）」と定め本格的な活動を展開、授業改善を教員・職員・学生の三位一体で改善・向上させようとする取り組みとして大学全体の授業改善につながる活動に取り組んできた。

今後はさらに学生の声を授業改善に活かし、学修者本位の教育への転換を目指すため、FIT-join の位置づけを明確化することとし、教育技術開発 WG の下に、学生 FD スタッフと FDer との定例の会議体の設置を検討するなど教職学の連携の強化を目指す。

【活動実績】

時期	内 容
H29/ 1月～4月	新入生オリエンテーションの企画運営
H29/3/2～3/3	学生 FD サミット2017春（山口大学）参加
H29/9/15	FD Café「アクティブラーニングの話をしよう」開催教職員と学生 FD スタッフが AL について意見交換
H29/11月	教員インタビュー FDer の教員に講義の工夫や教育への思いについてインタビューを実施
H29/12月	広報誌「Future Design 学生とともに、先生とともに創る」発行学生 FD の活動や教員インタビューの内容を紹介
H29/12/16	Q-Conference2017（九州地区大学教育改善ネットワーク年次大会）にてポスター発表
H30/ 1月	「学生による学習意欲調査」実施 一般学生に授業の満足度やモチベーションを保つ方法などについてアンケートを実施（回答者：414名）
H30/1月～4月	新入生オリエンテーションの企画運営
H30/6/18	FD Café「授業外の学修について話をしよう」開催 教職員と学生 FD スタッフが授業外学修の実際について意見交換
H30/7月・10月	Join-Talks 開催 学生 FD スタッフと参加学生の交流を図るとともに、学生の不安の解消や問題の解決などを一緒に考えていくイベント
H30/8/28～8/29	学生 FD サミット in 京都光華女子大学参加
H30/10月～11月	教員インタビュー・授業参観実施
H30/12月	広報誌「Future Design 学生とともに、先生とともに創る」Vol2発行学生 FD の活動や教員インタビューの内容を紹介
H30/12/22	Q-Conference 2018（九州地区大学教育改善ネットワーク年次大会）にてポスター発表、ポスター優秀賞銀賞受賞
H31/ 1月～4月	新入生オリエンテーションの企画運営
R1/5/27	キックオフミーティング 2019年度活動計画について教職学で目的の確認、共有
R1/ 8月～10月	教員インタビュー・授業参観実施
R1/10/9	学生発案型授業「Join → connect」開催 学生が学生目線で授業をデザインし、学生の能動的な学びの意欲に応えるとともに、学生が自ら授業を企画し形にしていくプロセスを通じ、企画立案、問題発見・解決などの経験をもとに、福工大の「学びのコミュニティ」の礎を築くことを目的とした取組
R1/10/28	「FIT-AIM 利用状況ヒアリング」実施 学生スタッフと職員による「FIT-AIM の授業の振り返り」機能に対する意見交換会
R1/11月	「学生による授業や大学生活での不満や改善点調査」実施 一般学生に授業の満足度や生活面での不安／不満についてアンケートを実施（回答者：235名）
R1/12月	広報誌「Future Design 学生とともに、先生とともに創る」Vol3発行学生 FD の活動や教員インタビューの内容を紹介
R2/ 2月	「FIT 学生団体サミット」開催 学内で学生が自ら運営する団体に属している学生がお互いの活動を共有、理解し、学内における課題や解決策を学生同士で話し合うイベント
R2/2/25	FD 教職学ミーティング ACC WG + FIT-join 活動報告および意見交換



H30/6/18 FD Café 教職員との意見交換



H30/12/22 Q-Conference 学生FDの活動をポスター発表



広報誌 Future Design 発行



R1/10/9 学生発案型授業「Join → connect」開催

6. 学習ポートフォリオの開発と導入、活用

6-1 学習ポートフォリオの開発と導入

ALによる学習効果を高めていくためには、学生の「やる気・動機づけ」が重要な要素となる。それらを継続的に保持、向上させていくためには、目標を設定し、その達成のため自らをモニタリング（メタ認知）しながら調整をしていくという能動的なプロセス（自己調整学習）へと学生が進むよう支援する必要がある。これまで本学では、キャリア活動の記録に主眼を置いた「キャリア・ポートフォリオ」を運用してきたが、本事業の取組として、これをより汎用的なシステムへと改善し、学習ポートフォリオとして開発、授業改善や自己調整学習を支援できる形成的アセスメントツールとして活用していくこととした。名称は、「主体的学びのための双方向学修支援システム【略称】：FIT-AIM（フィットエイム）＝FIT-Active, Interactive, Managing system」とし、平成30年度4月から運用を開始した。

【学習ポートフォリオ（FIT-AIM）の画面】

【主な機能】

- ①学期の目標と計画
- ②学期の振り返り（学期の取り組み状況のまとめ、目標達成状況の自己評価）
- ③授業の振り返り（「取組姿勢」、「講義理解」についてのルーブリックによる主体性評価）

項目	
取組姿勢:	● 4 ● 3 ● 2 ● 1 ● レベル内容を表示 ④ 模範となる学習行動をとった。 (発表問題に挑戦する、友人に教える、リーダーを務めるなど) ③ 学習を深めるために自分から働きかけを行った。 (質問や意見表明を行うなど) ② 後で復習しやすいよう工夫しながら取り組んだ。 (板書以外の先生のコメントもメモするなど) ① 学習環境を整え学習内容を理解しようと努めた。 (ノートを工夫する、集中して取り組むなど)
講義理解:	● 4 ● 3 ● 2 ● 1 ● レベル内容を表示 ④ 講義内容を越えた課題を行い、理解できた。 ③ 講義の内容を理解できた。 ② 講義の内容をほぼ理解し、分からない点や課題をまとめられた。 ① 講義の内容を半分程度理解した。

④課外活動の記録

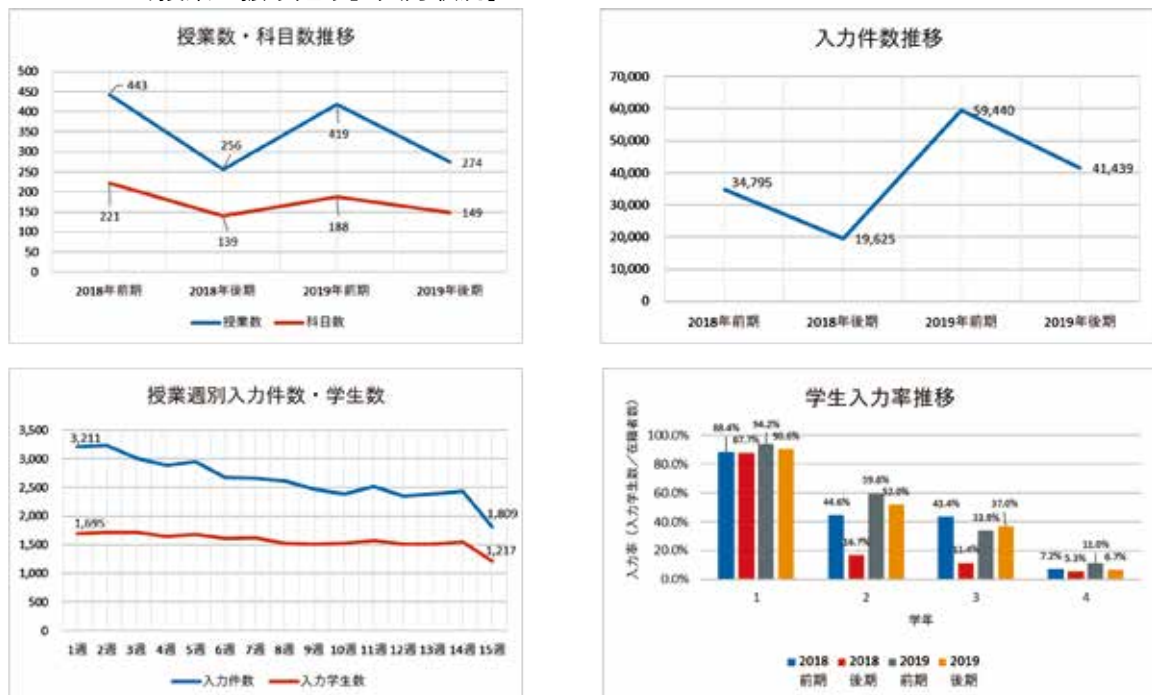
⑤成果物の登録

6-2 学習ポートフォリオの活用状況

(1) 入力件数（「授業の振り返り」）

本年度における利用授業数は、前期419授業（188科目）、後期274授業（149科目）となっており、全授業科目（706科目）の約半数で活用されている状況である。活用例は様々だが、授業での毎回の振り返りや、それをもとにした宿題（課題）の提出・返却、講義理解度や取組姿勢の確認および成績評価への活用、講義中間期におけるアンケートとしての活用などが行われている。

【FIT-AIMの「授業の振り返り」入力状況】



(2) 授業での活用事例

①「教養科目」

- ・授業終了時に授業の振り返り（「学んだこと」「疑問に思ったこと」「できるようになったこと」）の記載を指示。分量・具体性を評価。クラスの理解確認のため、次回講義の冒頭で5名程度の記載内容を共有。
- ・授業での指示は無いが、学生が自主的に登録。

②「専門科目」

- ・毎回の授業の振り返りの記載を指示。記載の有無に加え、授業内容を踏まえて、その内容が具体的かどうかをチェック。FIT-AIM 入力の有無 + チーム課題（宿題）の取り組み状況を勘案し、FIT-AIM20点を配点。
- ・授業の気づきや学んだことについて記載を指示。内容が指示通りで、最終週までに15回分の記載があれば FIT-AIM20点を配点。15週のうち3週（回）はチームでのプレゼンがあり、気

づき等はそこで発表し共有をする。

- ・ 毎回の授業の振り返りの記載と宿題の提出を指示。評価の一部とする。
- ・ 授業の振り返りの記載を指示し、記載した学生に対しては採点した宿題答案を返却。

③「卒業研究」

- ・ 就職活動で休むという場合に、報告書（どんな会社、どんなことをした）を提出。「成果物の登録」機能を使い、教員が作成したひな形に記載したものを登録。
- ・ 週1回、1週間の取組内容の記載を指示し、これを元に ppt による1週間のまとめや月例技術レポート作成。教員は学生のプレゼン前に FIT-AIM の入力内容を確認し、取組状況を把握。

④中間アンケートとして活用

- ・ 講義第4週～5週目の形成的評価として FIT-AIM の機能を活用してアンケートを実施、授業改善につなげる。

(3) 活用の効果

活用している教員より、次のような意見が挙げられている。

【教員意見】

- ・ 科目の性質によるが、毎回授業の振り返りを記載することで理解すべき重要な点が整理される。
- ・ 講義理解度が毎回グラフでチェックできるのは良い。教員の実感とも合っている。
- ・ 学生の「授業の振り返り」を理解度の確認に活用でき、授業中に他学生にも共有することにより見えない疑問点の理解促進に繋がっている。
- ・ 授業の振り返りを見ると、客観的に自分を見ることができている、わからないところを整理できている学生を確認できる。
- ・ 振り返りの記載方法について、ノートの様を書く学生もいれば、躓いたところを書き、他の科目でも生かせる勉強法として定着させる学生もいる。
- ・ 学生は記入した内容が授業中に共有されることにより、疑問を解消できるメリットを実感でき、学生のモチベーションアップが期待できる。

授業改善や学生の自己調整学習を支援するツールとして、それぞれの授業形態に合わせた活用が確認されている。また、利用している教員はその効果を実感しているものの、未活用教員への利用促進、また新たな活用方法の提案などが引き続き課題として挙げられ、FD 研修会（FD café）で活用事例の共有を行うなど、引き続き活用促進を行う予定である。

6-3 学生の自己調整学習支援

本学が目指す「実践型人材」の基盤となる学生の自己調整学習を進めるため、AL 型授業推進プログラムにて開発導入した学習ポートフォリオ（FIT-AIM）の活用に取り組んだ。

平成30年度は試行導入期間として、全学生の約50%が1回以上の入力を行ったが、後期にはその利用も減少していた。一方で利用の教員からは入力の効用や主体性の伸びの把握など事例も示されてきたことから、令和元年度はそれらの効用を広く伝え、利用教員の増大を図るとともに、学生の入力機会増加を図り、継続的入力による自律的学習に向けての効果を実感させることを企図した。

特に、学生が、FIT-AIM を用いて、日々の授業の振り返りや、学期毎の成果を振り返り次期の目標を設定することを授業内外で促すとともに、その内容を基にしたフィードバック面談を1年次の全学生を対象として実施した。

実施概要は次の通りである。

対象者	1年次必修科目「コミュニケーション基礎」受講生（再履修者を含む）
日程	後期開始2・3週目（10月初旬）
時間	授業の後半45分間
枠組み	（学習目標に関する）学生プレゼンテーション対応およびフィードバック
目的	前期の学修状況の振り返りを行い、後期の学習に繋げるための支援（自己調整学習の動機づけ支援）
形式	グループプレゼン（学生8名に対して全40分間）
ツール	学習ポートフォリオ（FIT-AIM）の内容、プレゼン評価シート
担当職員	10課から31名、のべ138名
職員の役割	①学生プレゼンの進行・対応 ②学生へのフィードバック

実施状況として、対象者1,049名のうち参加者は1,025名で実施率は97.7%となった。また、フィードバックの前提となる対象学生のFIT-AIM 入力状況は、それぞれ次の通りであった。

- ・「次期の目標」919件（2019年度入学生1,045名）入力率：87.9%
- ・「主体性の自己評価（ルーブリック）」824件 入力率：78.9%
- ・「授業の振り返り」入力コメント591件

なお、本フィードバック面談を担当する教職員については、事前研修やFD Cafe を通じて自己調整学習についての理解を深め、面談に臨んだ。実施状況および担当教職員のコメントから、このフィードバック面談の目的である前期の振り返りと後期の学習に繋げるための自己調整学習支援については、概ね達成できたと考える。

引き続き、特に1、2年次の学生を対象として入力の機会拡大を図り、フィードバック面談などFIT-AIM を活用した学習のアセスメントを実現する仕組みを構築する。あわせて3、4年次の学生への入力指導の機会を創出していくこととする。

6-4 アセスメント・ポリシーに基づく教育点検活動への活用

令和元年度はアセスメント・ポリシーの段階的導入にあたり、カリキュラムレベルおよび学生の学習レベルのアセスメントとして、FIT-AIM を活用した取組を進めた。

本事業の成果目標である「知識の定着」はGPA等の指標で裏づけられるが、もう一方の目標である「能動的学習態度（主体性）の涵養」については、実感値はあるものの定量的に指標が示されたものとなっていない。そこで、試行導入した「主体性ルーブリック」の利用浸透を図ると共に、FIT-AIM によるその可視化を進めた。具体的には、「主体性ルーブリック」は成績評価ガイドラインでDPのG、H、Iの成績評価方法として推奨しているが、メタルーブリックであり、これを授業レベルにてカスタマイズする必要がある、浸透が進んでいないという課題があった。そこで、教育技術開発WGにおいて、各WGメンバーが担当授業において「主体性ルーブリック」による学生の自己評価を実施し、活用に向けた課題を抽出することから議論を始めた。各種アンケートの結

果分析も交え、引き続き来期にその可視化方法の開発に向けて検討を続けることとした。

なお、本学のアセスメント・ポリシーは、大学全体、学部・学科（カリキュラム）、授業科目に加えて、学生レベルについても定めている。そこで、学生の学習レベルのアセスメントとして、FIT-AIM を用いた期毎の振り返りとして、「今期の振り返りと次期の目標」に加えて「主体性ルーブリック」にも入力させ、その集計値の推移を学科カリキュラムの教育点検の指標として活用することとし、そのシステム開発の検討を開始した。

第 3 章

取組の成果

3

取組の成果

取組の成果

1. テーマにおける必須指標と事業目標に対する達成度

本事業における必須指標および事業目標に関する達成度は以下のとおりである。

【テーマにおける必須指標】

項番	テーマにおける必須指標	単位	H26年度	H27年度	H28年度		H29年度		H30年度		R1年度	
			実績	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
1	アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合 [% (導入科目数 / 総科目数)]	%	53.6	38.8	50.0	52.0	70.0	80.2	80.0	80.7	80.0	82.8
2	アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合 [% (必修科目数 / アクティブ・ラーニング科目数)]	%	31.4	33.0	25.0	36.1	23.0	36.4	20.0	37.0	20.0	40.3
3	アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合 [% (受講学生数 (実数) / 在籍者数)]	%	96.6	87.0	75.0	88.6	78.0	89.5	80.0	88.9	80.0	89.6
4	学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数 [受講科目数 (受講延べ人数 / 在籍者数)]	科目	10.4	6.1	7.0	8.6	8.0	13.5	10.0	13.1	10.0	13.4
5	アクティブ・ラーニングを行う専任教員数 [% (実施専任教員数 / 総専任教員数)]	%	64.4	60.8	60.0	88.2	70.0	95.7	80.0	96.6	80.0	99.3
6	学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間 [時間数 (1週間あたり (時間))]	時間	—	2.3	16.0	4.0	18.0	6.3	20.0	6.1	20.0	7.2

【事業目標】

項番	各大学等の任意の指標	単位	H26年度	H27年度	H28年度		H29年度		H30年度		R1年度	
			実績	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
1	AL型授業推進組織の設置時期	—	H26.10 設置	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	ファカルティディベロPPER数 [人]	人	—	—	2	3	3	5	4	6	4	7
3	ディプロマ・ポリシーの改訂	—	—	全学科 実施	—	運用 開始	—	見直し 実施	—	—	—	—
4	カリキュラム・ポリシーの改訂	—	—	全学科 実施	—	運用 開始	—	見直し 実施	—	—	—	—
5	アドミッション・ポリシーの改訂	—	—	全学科 実施	—	運用 開始	—	見直し 実施	—	—	—	—
6	AL事例調査実施対象校数	校	3	3	2	3	2	3	2	2	2	0
7	ALテーマ講演会、報告会の開催回数 (FD Café、AL実践研究会)	回	3	3	2	4	2	2	2	5	2	4
8	クラス・サポーター数 [人]	人	20	72	40	77	50	75	60	78	60	80
9	クラス・サポーター事前研修プログラムの開発時期	—	H27.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	学生FDスタッフ数 [人]	人	—	—	—	—	10	14	20	13	30	11
11	AL対応教室数	教室	6	7	9	9	—	—	—	—	—	—
12	AL型授業アーカイブシステムの導入時期	—	—	H27.7	—	—	—	—	—	—	—	—
13	AL型授業アーカイブシステム活用FD研修回数	回	—	2	1	1	1	1	1	0	1	0
14	AL型授業アーカイブシステム利用授業数	コマ	—	153	—	212	185	239	210	312	210	321
15	AL型授業アーカイブシステムを活用して振り返り学習をした学生数 [人]	人	—	562	50	602	65	590	80	810	80	922

16	在学生・卒業生アンケートの実施回数	回	—	1	1	1	1	1	1	2	1	2
17	評価委員会開催頻度 [回]	回	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
18	「FD Annual Report AL 特集号」掲載件数 (論文)	件	—	—	—	—	5	3	—	—	5	3
19	「FD Annual Report AL 特集号」掲載件数 (実践報告)	件	—	—	—	—	10	5	—	—	10	3
20	「能動的な学習態度」の評価方法の確立	—	—	—	—	—	試行開始	検討開始	評価開始	評価開始	評価定着	評価実施と再検討
21	学習ポートフォリオの開発	—	—	—	—	—	—	開発実施	運用開始	運用開始	運用定着	運用定着

定量的な数値目標の達成状況は、テーマにおける必須指標に関しては、項番1から5までの目標値を達成した。特に、本事業で目標としてきた項番1・3・5の3つの80%が直近3年間続けて達成できたことは、事業が全学で定着していることの証左といえる。この中でも、項目1のここ3年来の延びと安定は特筆すべきものである。この背景としては、AL 導入科目の割合を明らかにするために実施している教員アンケートの回答率が9割を超えたことが大きい（令和元年度92.0%、平成30年度90.1%、平成29年度91.8%）。回答率が向上したということは、AL 展開の必要性について多くの教員が理解を深めるとともに、これまで未回答や未実施であった教員が、これまで実施した種々の施策を通じて、本学におけるAL の定義や手法を共有した結果、AL 実施と回答するよう変化したものであり、全学展開の具体的進展を実質的に示している。

必須指標の項番6の学生一人当たりのAL に対する授業外学修時間については、実績値が目標値に届いていない。そのため令和元年度（平成31年度）には目標値との乖離にいていくつかのデータ検証を行い、原因分析を行った。平成30年度の授業外学修時間の実態は、1 授業当たり平均は53分、平均受講数を掛けると約7.3時間となる。そのうちAL 型授業での学修時間は6.1時間であった。1 授業での状況の分析を行ってみると、平均は31分～60分が最多。最大時間は300分で実験やプログラミング、ゼミナール科目などで学修時間が長いことが判明した。これら授業での授業外学修の内容や指示方法等を分析し、指導や授業運営に活用することとした。また、シラバスでの記載内容との関連では、授業外の学修内容がシラバスに記載ありの授業の方が無しの授業よりも時間が長く、そのうち具体的な学修時間の記載よりも具体的な学修内容の記載がある場合には、時間の伸びに繋がっていることも分かった。この分析に基づいて令和元年度（平成31年度）より改訂されたシラバスでは授業回毎の記載を指示したことにより、7割を超える授業（令和元年度前期）で具体的な学修内容・方法が記載されることとなった。それらの取組みによって令和元年度（平成31年度）は8.8時間、AL 型授業では7.2時間と前年度までと比較して大きな伸びを示した。しかしながら設定した週20時間という目標には到達できていない。今後は学生の主体的な取組みが授業外学修時間伸長には重要となる。そのためすでに導入している学習ポートフォリオ（FIT-AIM）での授業外学修の計画と実施の確認や学生の生活時間管理（1 週間の生活時間を授業外の学修を含めて記録し、自己管理を行う）を行う機能を活用して必要な授業外学修が行われているか学生自らが振り返り、自己調整学習を行っていくことができるよう支援する取組を推進していく。

本学任意の項目については、設定した大多数の指標について、目標値を達成もしくは上回る状況で推移している。その中で、令和元年度の主な取組として、FDer の業務・役割の見直しに伴う活動の活性化、新たに策定したCS 育成プログラムの実施、卒業生調査の実施など、これまでの課題

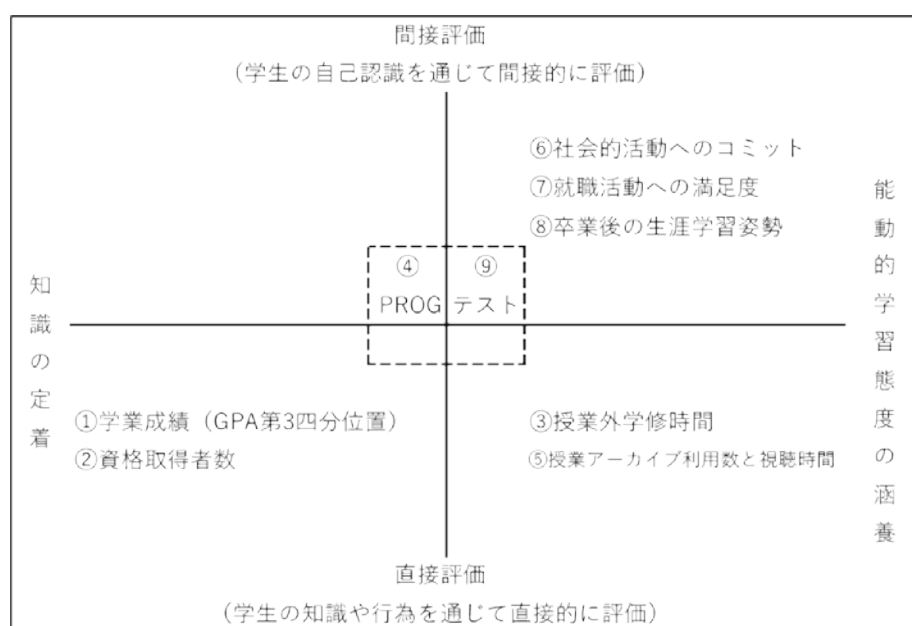
への対応を強めるとともに、成果を確認しながら、改善点を見出していくという点検・評価のサイクルを回す道筋をつけた。

2. 成果の測定項目とその分析結果

2-1 ALの伸展に伴う成果の測定項目

本取組では、ALの進展に伴う成果の測定項目を、学生の「知識の定着」と「能動的な学習態度の涵養」のそれぞれについて以下の図のとおり設定し、その測定データによるエビデンスを踏まえて取組の改善を行っている。

【成果の測定項目】



各測定項目についての内容と、それに基づく改善事項は以下の通りである。

項番	項目	単位	調査実施時期	H26実績	H27実績	H28実績	H29実績	H30実績	R1実績
【知識の定着の程度】									
1	学業成績 (GPA 第3四分位置)	—	H26～	1.58	1.59	1.63	1.64	1.66	1.68
2	資格取得者数	人	H26～	280	257	279	237	302	260
【能動的な学習態度の涵養】									
3	授業外学修時間 (全学平均)	時間 / 週	H27～	—	6.2	7.5	7.7	7.2	8.8
4	自己成長感と学習への内発的動機づけ (ジェネリックスキル)	—	H27: 1年次 H29: 3年次	—	テスト実施	—	テスト実施	—	—
5	授業アーカイブ利用数と視聴時間	時間 科目	H27～	—	5.3時間 153コマ	3.1時間 212コマ	3.5時間 239コマ	4.3時間 312コマ	3.5時間 321コマ
6	社会活動へのコミット (ボランティア活動や地域活動への参加率)	%	H27～	—	—	28	—	—	—
7	就職活動の状況 (就職先が自分の目標に適切であるとした満足度)	%	H27～	—	91.2	92.9	96.1	93.0	—
8	卒業後の生涯学習姿勢	—	H30	—	—	—	—	調査実施	調査実施
【総合評価】									
9	自己成長感と学習への内発的動機づけ (ジェネリックスキル)	—	H27: 1年次 H29: 3年次	—	テスト実施	—	テスト実施	—	—

「知識の定着」の程度を示すものでは、学業成績（GPA 第3四分位値）を追跡して確認したところ、全学平均で毎年度上昇、学業成績の底上げに一定の成果が見られている。「能動的な学習態度の涵養」を示すものは、授業外学修時間の伸び、授業アーカイブシステム利用授業数と視聴時間の伸びなどにより成果が確認される他、卒業生アンケートでは就職活動への満足度の上昇が確認されており、さらに同調査では学生生活を通じて最も積極的に取り組んだことに正課（授業、卒研・ゼミ）を挙げる比率が上昇し、正課に最も積極的に取り組んだ学生ほど自ら準備活動を行い、就職先企業が目標に適ったものである傾向が認められ、ALの成果といえる結果が出ている。

2-2 AL 実施状況と経年変化

AL 実施項目の経年変化を見ると、「双方向性の確保」が最も高く、その他の項目には大きな変動は見られない。特に高次 AL とも言われる「グループを学習単位とする」「学習成果の共有を促す」については安定傾向にあるともいえる。これについては、教員の AL 実施率が高まるとともに各々の授業の形態や特性に合わせた AL の実施方法が採用されているものと判断する。事業開始当初はグループワークのみが主な手法と認識され、実施の煩雑さ等から AL 全学展開の妨げにもなっていたが、複数の手法や効果が広がりを見せるにつれて AL の全学展開も進展している。これらから言えることは、高次 AL のみで教育が成り立つわけではなく、多様な手法を取り入れ、プロセスを工夫するなど土台が広がることで高次の手法に繋がっていく。手法によってレベルに高低があるわけではなく、それらの取組も教育効果があると捉えられる。

【AL 科目で実施している AL 要素】

	2016 (H28)				2017 (H29)				2018 (H30)				2019 (R 1)			
	前期		後期		前期		後期		前期		後期		前期		後期	
	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ
①2人以上のグループを学習単位としている	49.5	67.4	45.8	52.4	35.1	44.6	39.6	44.4	36.6	41.7	38.3	43.4	35.8	43.4	39.3	40.9
②ミニツツペーパー等による短いレポートを求めている	51.1	51.6	46.7	48.1	44.7	41.2	41.2	41.1	48.8	48.2	46.6	45.8	43.3	48.6	44.6	44.7
③議論や発表等学生の意見表明がある	49.2	55.3	53.3	54.5	49.0	48.0	52.8	55.6	47.0	43.9	53.4	52.1	50.6	49.7	52.2	49.7
④グループ単位で学習成果の共有を促している	34.6	51.1	38.6	46.3	31.0	38.1	32.5	41.4	29.1	33.5	39.2	46.7	33.9	38.1	34.1	36.2
⑤その他、教員と学生との双方向性が確保されている	81.0	82.1	76.8	78.8	86.1	87.6	83.3	84.7	84.0	84.5	85.8	86.1	87.0	87.8	86.5	88.5

【AL 実施項目の経年比較（全授業）】



【AL 実施項目の経年比較（専任授業のみ）】



3. 点検・成果公表

3-1 学生調査からみる事業の成果

(1) 授業アンケート

本学では、授業アンケートの設問項目に、ディプロマ・ポリシーに示す要素について、「自分が成長させたいと考えていた力」「実際に伸ばすことができた実感している力」を問い、学習成果の振り返りを行っているが、そのデータについて、事業開始直後の2015年度前期の数字を100%としてその後の変動状況を見たところ、ディプロマ・ポリシーのうち、ALの進展により特に伸長を目指す要素であるG/H/Iの学生の自己評価が高まっていることが分かる。これは、AL型授業が増加したことにより、協働型の課題や、自主的な学びへの取組の機会が増えた結果であると推定される。今後は、これらについて各授業が育成しようとしている力と学生との実感にずれがあるかどうかの検証を行うことにより、教育方法と学修成果とのつながりを見ることができる。

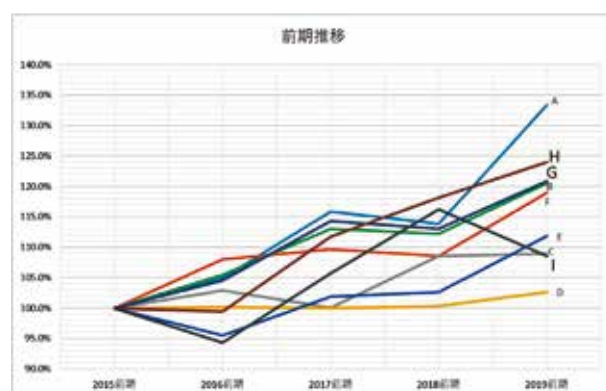
【授業アンケートの項目集計】

4. この授業で成長させたいと考えていた『力』は同ですか。当てはまるものを3つまで選んでください。
5. この授業を通じて実際に伸ばすことができた実感している『力』は何ですか。当てはまるものを3つまで選んでください。

No.	選択項目	問4	問5
A	地球的観点から多面的に物事を考える能力とその素養	3,416	3,148
B	技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び社会に対して負っている責任に	3,768	3,500
C	数学及び自然科学（人文社会科学）に関する知識とそれらを活用する能力	5,291	5,005
D	当該分野において必要とされる専門知識とそれらを活用する能力	10,663	10,092
E	種々の科学技術、情報及び知識を活用して社会の要求を解決するためのデザ	2,701	2,626
F	論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力	4,196	4,001
G	自主的、継続的に学習する能力	6,859	6,642
H	与えられた制約の中で計画的に仕事を進め、まとめる能力	3,598	3,630
I	チームで仕事をするための能力	2,752	2,874

(2019年度前期)

【実際に伸ばすことができた実感している力の経年変化（2015前期を起点）】



(2) IR コンソーシアム在学調査

学習成果の測定を目的とした学生調査については、2018（平成30）年度から「大学 IR コンソーシアム」に加盟し、教学 IR データを全国共通の調査票で収集・分析することにより、学生調査項目の共有、調査結果の相互比較に加え、認証評価や格付け評価等の内部質保証のエビデンスとして活用することとしている。2017（平成29）年度の試行を経て2018（平成30年）10月に初の本調査を

実施した。その結果によると本学は1年生が他の調査参加の工学系大学（総合大学の工学系学部を含む）の1年生と比較して、高校時代に特に主体的に授業に臨んでいた訳ではないにもかかわらず、大学入学後は自分の考えや研究を発表したり、学生同士の議論に多く参加したとの回答を行っている。また「増えた知識、能力」として「他者協働」や「コミュニケーション能力」、「人間関係構築」といった協働性、「プレゼンテーション能力」「文章表現」など表現力に関する項目について他の工学系大学と比較して大きく増えたと回答しており、本学入学後のALの成果と考えられる。

2018年度 1 年		FIT(本学) %	工学系 %	差異 %
高校3年時：授業中に質問した	ひんばんにした	44.5%	47.7%	-3.2%
	ときどきした			
高校3年時：自分の意見を論理的に主張した	ひんばんにした	42.0%	44.5%	-2.5%
	ときどきした			
高校3年時：問題の解決方法を探し、それを他の人に説明した	ひんばんにした	59.5%	59.0%	0.5%
	ときどきした			
高校3年時：自発的に作文の練習をした	ひんばんにした	23.4%	23.8%	-0.3%
	ときどきした			
高校3年時：授業の予習や復習、宿題をした	ひんばんにした	75.5%	68.5%	7.0%
	ときどきした			
高校3年時：自分が取り組んだ課題について教師に意見を求めた	ひんばんにした	44.2%	45.8%	-1.6%
	ときどきした			

本学 n = 674 工学系 n = 9,665

2018年度 1 年		FIT(本学) %	工学系 %	差異 %
実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ	ひんばんにあった	69.9%	65.5%	4.4%
	ときどきあった			
学生が自分の考えや研究を発表する	ひんばんにあった	69.6%	52.5%	17.1%
	ときどきあった			
授業中に学生同士が議論をする	ひんばんにあった	78.8%	57.5%	21.2%
	ときどきあった			
授業で検討するテーマを学生が設定する	ひんばんにあった	27.9%	31.6%	-3.7%
	ときどきあった			
授業の進め方に学生の意見が取り入れられる	ひんばんにあった	39.9%	37.2%	2.7%
	ときどきあった			
TA や SA などの授業補助者から補助を受ける	ひんばんにあった	71.1%	62.8%	8.3%
	ときどきあった			

入学時と比べて変化した能力や知識 大きく増えた・増えたとの回答割合

	FIT(本学)	工学系	差異
	%	%	%
他者協働	69.1%	56.0%	13.2%
C P 操作能力	87.1%	75.5%	11.5%
時間の効果的利用	59.5%	48.3%	11.2%
コミュニケーション能力	61.3%	50.8%	10.4%
人間関係構築	63.5%	53.1%	10.4%
プレゼン能力	50.3%	40.7%	9.6%
分析力や問題解決能力	66.6%	57.5%	9.1%
文章表現	53.0%	44.0%	9.0%
一般的な教養	74.9%	66.0%	8.9%
国民が直面する問題理解	39.6%	33.2%	6.5%
異文化知識	48.7%	42.8%	5.8%
リーダーシップ	31.5%	25.9%	5.6%
専門分野や科学の知識	84.7%	79.4%	5.3%
グローバル問題の理解	33.4%	30.0%	3.4%
批判的思考	49.0%	45.9%	3.0%
地域社会問題の理解	35.5%	32.8%	2.6%
数理的能力	56.1%	55.9%	0.1%
異文化協力	27.4%	28.0%	-0.5%
外国語能力	27.7%	35.7%	-8.0%

在学時の変化については、令和元年度実施した2回目の調査で対象となった3年生が平成29年度の試行実施時の1年生であることから、両者を比較してみることができる。2つの調査双方に回答の学生（231名）の回答を比較すると授業の形態として学生同士の議論の機会は3年生では大きく減少したものの、自分の考えや研究を発表することや授業の進め方に学生の意見が取り入れられることが増加したことが分かる。また「身に着けた力」としては3年生では全体的に伸びがみられる中、とりわけ「プレゼンテーション能力」が大きく伸びた他、「リーダーシップ」「文章表現」など表現力も伸びを示している。また「分析力や問題解決能力」「数理的能力」など思考力や判断力も大きく伸長している。これらのことは学年進行に伴ったAL型授業の変化に連れて、学生の取組みが協働的なものからより個別的で主体的なものに変容していることを示しており、本学で展開されるAL型授業が形態や対象学年によって多様な方法で実施されることにより、必要とされる様々な能力の習得につながっているとみることができる。

現在の授業での経験機会

2017年度1年→2019年度3年		1年次 %	3年次 %	差異
実験、実習、フィールドワークなどを実施し、 学生が体験的に学ぶ	ひんばんにあった	82.1%	84.4%	2.3%
	ときどきあった			
学生が自分の考えや研究を発表する	ひんばんにあった	56.7%	61.5%	4.8%
	ときどきあった			
授業中に学生同士が議論をする	ひんばんにあった	81.8%	67.5%	-14.3%
	ときどきあった			
授業で検討するテーマを学生が設定する	ひんばんにあった	33.3%	28.6%	-4.8%
	ときどきあった			
授業の進め方に学生の意見が取り入れられる	ひんばんにあった	50.6%	58.4%	7.8%
	ときどきあった			
TA や SA などの授業補助者から補助を受ける	ひんばんにあった	78.8%	75.3%	-3.5%
	ときどきあった			

2017年度1年→2019年度3年 n=231

入学時と比べて変化した能力や知識 大きく増えた・増えたとの回答割合

	1年次 %	3年次 %	差異 %
プレゼン能力	52.4%	70.6%	18.2%
リーダーシップ	37.2%	51.1%	13.9%
数理的能力	60.6%	72.7%	12.1%
異文化知識	39.1%	50.6%	11.5%
分析力や問題解決能力	73.9%	84.4%	10.5%
批判的思考	64.3%	74.0%	9.7%
文章表現	53.2%	62.8%	9.5%
国民が直面する問題理解	45.9%	53.2%	7.4%
コミュニケーション能力	67.5%	74.5%	6.9%
時間の効果的利用	66.2%	71.4%	5.2%
人間関係構築	64.9%	69.7%	4.8%
専門分野や科学の知識	92.6%	95.2%	2.6%
他者協働	77.5%	80.1%	2.6%
一般的な教養	84.8%	86.6%	1.7%
C P 操作能力	89.2%	89.6%	0.4%

3-2 卒業生調査からみる事業成果

事業の点検・評価を目的とした卒業生に対する調査を以下のように実施した。これは本学の教育が実践型人材育成に寄与しているかを点検・評価するもので、調査にあたっては特に本事業（AL）での学びとキャリアとの接続を能動的な学習態度の継続という視点で検証を行う。

(1) 卒業生に対するアンケート調査

1. 調査の方法

- ① 2019年3月（2018年度）卒（学部卒1年目）、②2014年3月（2013年度）卒（学部卒5年後）
①は本事業開始後に入学した卒業生、②は比較対照群（キャリア教育未実施の学年）

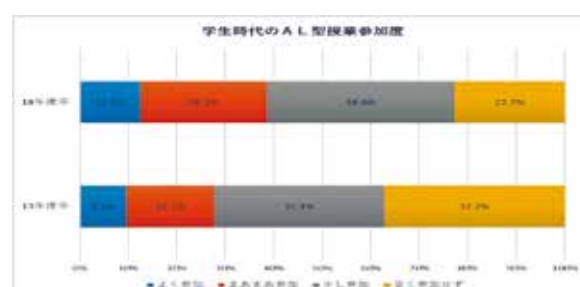
2. 調査の概要

- ・実施時期：2019年12月～2020年2月
- ・設問項目：大学 IR コンソーシアム卒業生調査（試行）を基本とし、本学独自の設問を追加する（設問詳細は「参考資料」卒業生調査設問項目を参照）
- ・実施方法：Web アンケート（QR コードを付した調査依頼票郵送）

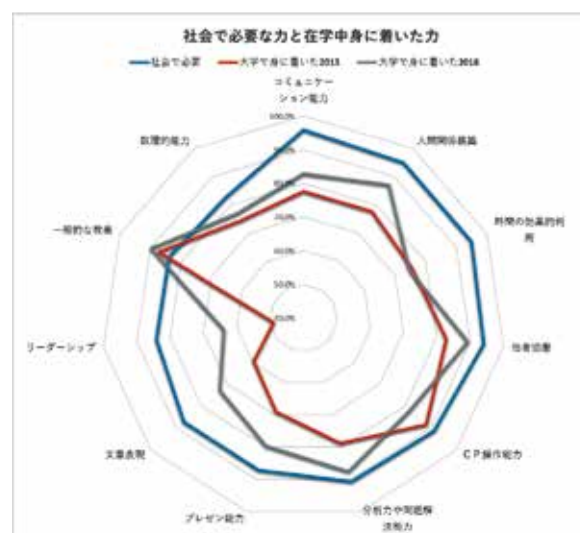
学生時代の A L 型授業参加度

	13年度卒	18年度卒	差異
よく参加	9.6%	12.5%	2.9%
まあまあ参加	18.1%	26.1%	8.1%
少し参加	35.1%	38.6%	3.5%
全く参加せず	37.2%	22.7%	-14.5%

13年度卒 n=94 18年度卒 n=176



	社会で求められている力（強く求められている、求められている）			在学中に身についた力（身についた、やや身についた）	
	2013卒	2018卒	平均	2013卒	2018卒
コミュニケーション能力	95.9%	96.1%	96.0%	77.7%	83.0%
人間関係構築	93.7%	96.1%	94.9%	77.7%	87.0%
時間の効果的利用	95.8%	93.9%	94.9%	75.5%	74.6%
他者協働	91.6%	96.7%	94.2%	82.9%	89.3%
C P 操作能力	92.7%	90.0%	91.4%	88.3%	81.9%
分析力や問題解決能力	88.5%	92.8%	90.7%	78.8%	87.6%
プレゼン能力	86.5%	87.7%	87.1%	69.1%	79.7%
文章表現	87.5%	86.6%	87.1%	59.6%	72.9%
リーダーシップ	81.2%	87.1%	84.2%	48.9%	63.9%
一般的な教養	80.2%	87.7%	84.0%	87.3%	89.8%
数理的な能力	80.2%	85.0%	82.6%	74.5%	76.8%



2018年度卒	比率	学生時代に身についた力（身についた・やや身についた）					
AL 参加度		コミュニケーション力	人間関係	文章力	プレゼン力	リーダーシップ	分析問題解決
		比率	比率	比率	比率	比率	比率
よく参加	12.5%	95.5%	100.0%	81.8%	95.5%	95.5%	90.9%
まあまあ参加	26.1%	89.1%	91.3%	73.9%	89.1%	80.4%	93.5%
少し参加	38.6%	83.8%	86.8%	64.7%	83.8%	54.4%	92.6%
全く参加せず	22.7%	67.5%	75.0%	55.0%	67.5%	45.0%	70.0%

卒業年度	学生時代に身についた力（あまり身につけていない・全く身につけていない）					
	コミュニケーション力	人間関係	文章力	プレゼン力	リーダーシップ	分析問題解決
	比率	比率	比率	比率	比率	比率
2013年度卒	22.3%	22.3%	40.4%	30.9%	51.1%	21.3%
2018年度卒	17.0%	13.1%	33.0%	17.0%	35.8%	12.5%
差 異	5.3%	9.3%	7.5%	13.8%	15.3%	8.8%

3. 結果の概要

本事業開始後に入学した2018年度卒業生とそれ以前の2013年度卒業生に、大学生活におけるALの参加度を尋ねたところ、2018年度卒業生の参加度が大きく上回っており、本事業におけるALの展開を裏付ける結果となった。また、それぞれの卒業生に「社会で求められる能力」を尋ねたところ「強く求められている」「求められている」とした項目や割合がほぼ同様であったのに対し、それらほとんどの能力で在学中「身についた」「やや身についた」と回答した比率が2018年度卒業生の方が2013年度卒業生を上回っている。特に「人間関係構築」や「コミュニケーション能力」や「プレゼン能力」、「分析力や課題解決能力」などで差異が大きいことが明らかになった。さらにそれらをAL参加度との関係で見ると、ALに「よく参加した」「まあまあ参加した」と回答している学生ほど、社会で求められている能力が「身についた」と回答していることも分かった。反対に「全く参加しなかった」と回答した者は、ALに「参加した」「少し参加した」者に比べて求められる能力が「身についた」「やや身についた」と回答した割合が著しく低かった。結果としてこれら能力が「身につけていない」と回答した割合は2013年度卒業生と比較して2018年度卒業生全体でも大きく減少している。AL型授業への参加拡大が全体的に「社会で求められる能力」の涵養にもつながっている証左でもあり、本事業の成果が確認できるものであるといえる。

(2) 入社企業への聞き取り調査

1. 調査の方法

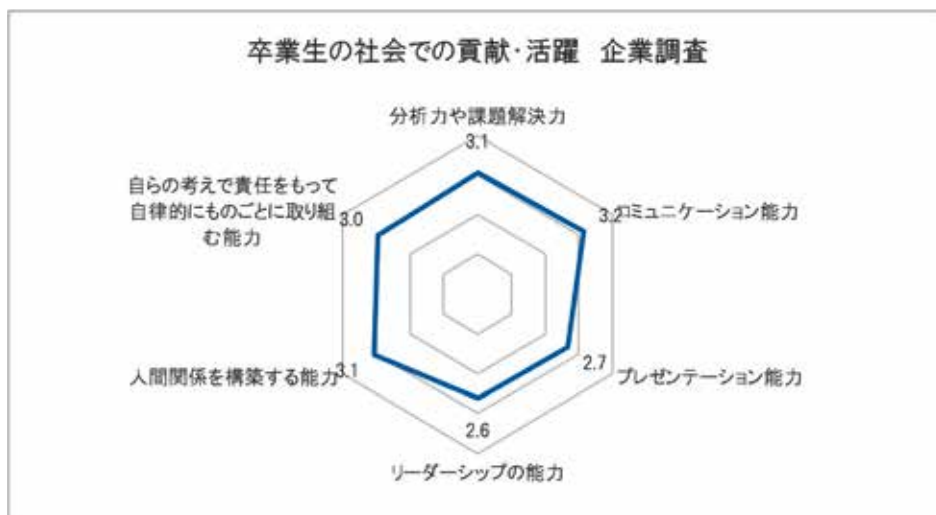
（2017、2018年度卒業生が就職している）企業担当者に対するヒアリング調査：6社

2. 調査の概要

- ・実施時期：2020年2月（卒業生調査の分析結果を受けて実施）
- ・設問項目：卒業生調査の独自設問を基本とし企業側の評価を聞く（6～7問）
- ・実施方法：訪問ヒアリング（30～40分）

3. 結果の概要

今回の調査では、当該事業開始時より本学に入学し、多くのAL型授業で学んだ卒業生が企業でその成果を発揮し、業容に貢献、活躍できているかについて各企業の人事担当者や現場の上席等にインタビューを行った。聞きとりを行う項目としては卒業生アンケートで「社会で求められる能力」として回答率が高い項目で、業種や企業規模を超えて汎用性の強い能力について重点化した。



インタビューに合わせて企業担当者から本学卒業生の現有能力について数値評価をしたものが上のグラフである。「自らの考えで責任をもって自律的にものごとに取り組む能力」については他の能力を総合したイメージであるため比較が難しいが、その他の能力についての評価が卒業生アンケートの回答とほぼ同様とみなすことができる。つまり在学中に身に着いた能力としている「コミュニケーション能力」や「分析力や課題解決力」については企業を問わず発揮されており、企業側の好評価につながっている。「リーダーシップの能力」や「プレゼンテーション能力」については卒業生アンケートの回答同様、企業でも課題と認識されているが、知識や経験によって発揮されるものとして今後期待されているなど、全体的には満足度は高いと判断している。

それぞれの聞き取り項目に対する主な意見

●分析力や課題解決能力

「こちらが与えた作業に対して、常に創意工夫を行っている」（建設業 A 社）

「現状の知識では少し難しいと思われる課題を提示した際、まずは①自身で考え、②その解決策について同期や上司に相談している。ステップとしては正しい」（情報処理業 D 社）

「社内の新規事業の担当メンバーとして、トラブルの要因分析とその解決策の提案が出来る。提案されたことがヒントになり、解決することが多い」（小売・サービス業 F 社）

●コミュニケーション能力

「論理的に会話を進めることができ、やり取りが上手である。バランサー的な役割」（製造業 C 社）

「周りの人の意見に対し、耳を傾け、話をするときは自分の言いたいことをしっかり伝えられている」（建設業 A 社）

「上司や先輩が伝えた言葉だけではなく、その意図を汲み取って動いている。他者よりも積極性を感じる」（小売・サービス業 E 社）

●プレゼンテーション能力

「説明する力はあるが、質疑応答への対応をもう少し頑張ってもらいたい。想定外の質問に対応す

るには経験値が必要だと思っているので、これからに期待している」(情報処理業 D 社)

「入社後に実施した研修の最終報告では、準備したことを説明するのに精いっぱい、相手に伝える技術(身振り手振りなど)が十分とは思わなかった。これからだと思う」

「朝礼でスピーチをさせている。話す機会を作って、この力を身につけて欲しい」(建設業 B 社)

●リーダーシップの能力

「先輩社員へ自身が主担当業務のレクチャーをする場面があった。臆することなく作業手順を説明できていた。担当者としての責任感からだと思う(小売・サービス業 F 社)」

「現場では施工図をもとに作業員への確かな指示を行い、手戻りのない仕事に努めていた。現場の作業員からも信用されている様子である(建設業 A 社)」

「複数社で取引際に出向いて開発業務を行うことも多く、他者の社員と比較すると優秀だと思っている。与えられた仕事を黙々とこなす他社社員が多いなか、コミュニケーションや積極性など大いに期待できる」(情報処理業 D 社)

●人間関係を構築する能力

「大人しいイメージだが、真面目で好印象であるため、先輩や上司にアドバイスをもらいながら着実に仕事を進めている」(製造業 C 社)

「多業者が入り混じる現場の中で、自ら働きやすい人間関係の構築に努めている。よく職場の人から食事にも誘われているようである」(建設業 A 社)

「入社当時からあると思っていたが、現在も成長していると感じる。必要があれば、直属の上司ではなく、その上(部長職)にも相談・報告が来ている。業務を通して知識が増え、自信を持って仕事に臨んでいる様子が伺える」(小売・サービス業 F 社)

3-3 評価委員会の実施

本取組では、毎年度2回の評価委員会を開催し、取組状況の報告を行っている。事業の進捗状況や取組の成果を外部の視点から評価頂くため、産業界(株式会社九電工、のち株式会社九建)、高等学校(福岡県立嘉穂総合高等学校)、専門家(学校法人河合塾教育研究開発部)を外部委員として迎え、本学からは学長(FD推進機構長)、事業推進責任者の教務部長(WG長)、WGのメンバーが出席するものである。

【開催実績】

●令和元年9月20日

●令和2年3月17日

評価委員会では、事業概要および個々の取組、取組の成果、評価指標等について、指摘・助言を得ており、それに基づいて事業計画の見直し改善を図ってきた。

3-4 外部への公表



令和元年11月30日、本学で「第3回工大サミット」を開催した。工大サミットではこれまでの2回では参加大学（東北工業大学、芝浦工業大学、愛知工業大学、大阪工業大学、広島工業大学、本学）の学長がAL型授業を含む各大学の教育改革の取組みを発表し、議論を行うなどしてきた。今回本学で開催するにあたって参加7大学（今回より神奈川工科大学が新規参加）の教職員で複数のワークショップを開催し、各大学の知見を共有する取

組みを実施した。そのうち「工大における教育の質的転換～教育の質保証とは～」をテーマとしたワークショップで本学の活動、特に授業外学修時間伸長の取組みについて報告を行い、それをもとに議論を行った。

同日開催された「テーマⅠ・アクティブラーニングシンポジウム」（立正大学）では「AL型授業の全学展開から始まった福岡工業大学の教育改革」と題して取組みをAL型授業全学展開の実質的進展、学生の学びの可視化、人材育成目標達成の点検・評価の項目に分け、説明を行った。

令和2年に入ってから事業の総括や今後の課題について広く公表を行うために大規模な報告会の計画や参加を行うこととした。3月5日・6日には「大学教育再生加速プログラム（AP）全体報告会」（武蔵野大学・有明キャンパス）で学生FD組織「Fit-Join」の活動報告を実施、学生視点でみた本学のALと学生の成長について説明を行うこととしていた。また3月17日には、本学で採択期間終了に伴う成果報告会「ALは知識の定着と能動的な学習態度の涵養をもたらしたか」の開催を計画した。当報告会では本学の6年間にわたる取組みを3つのフェーズを追って紹介するとともに、この取組みで得られた成果や知見などについても報告を行い、有識者のパネルディスカッションではALの定着の先に求められる学生の自己調整学習をいかに推進していくかについて議論を行うこととしていた。しかしながら新型コロナウイルス感染拡大防止による集会自粛方針を受け入れ、双方の報告会ともやむなく中止となった。これらの場での報告事項については、事業終了後にあらためて機会を設けて発表することとする。

4. 今後の課題

これまで6年間の取組みにより、AL型授業は本学教育の根幹を支えるものになっている。補助期間終了後も全学的な実施体制は堅持し、さらなる充実をめざすこととしている。すでに全学で80%を超える授業がALで実施されており、量的には現状を維持することを目標とする。一方で重要なのがこの事業による成果の可視化をもう一段進展させていくことである。

本学ではALの全学展開を契機に学習成果全体の可視化にも関心を深め、令和元年度には新たな「成績評価のガイドライン」を作成し、成績評価の適正化・平準化に向けた取組みを深化させている。当該事業の目的である「知識の定着」と「能動的な学習態度の涵養」が実現されているかについても達成目標と測定方法の対応を明確にすることで可視化を進めている。すでに全学で授業の多くがAL型で実施されている中では特に「能動的な学習態度」いわゆる「主体性」の涵養が図られ

ているかについて適切に測定することが求められている。これについては「主体性のルーブリック」などのツールが用意されているものの、個別の授業での評価については現状では不明瞭さを残している。全学での AL 型授業の展開が学生の主体性涵養に効果をもたらしているとの前提のもと、今後は個別の授業からだけでなく、カリキュラム全体或いは正課外活動を含めて総合的に測定・評価することも検討していく必要がある。

さらには令和元年度からは策定・導入を行った「アセスメント・ポリシー」に沿った点検・評価活動も開始している。この活動は「教学マネジメント」の主要な取組みであり、質保証を確立するためのものである。この取組みによって学部・学科や授業レベルでの改善が進むことが主眼ではあるが、もとより本学ではすでに主な教授方法となった AL 型授業が授業やカリキュラムの目的に沿って適切、有機的に実施、展開されているかもあわせて点検することが求められる。

本学が人材育成目標として標ぼうする「実践型人材」として社会で活躍できているかについて今年度初めて「企業インタビュー」を実施した。本学卒業生の仕事ぶりについては概ね高評価を受け、AL 型授業の効果を実感することができた。今後は調査対象卒業生や企業を拡大することにより、全学として育成できている力や不足している力を導き出し、教授方法の転換やカリキュラムの改善に不断につなげていく。

AL 型授業の全学展開、そこを起点とした成果の可視化、そして授業やカリキュラムのアセスメント活動は、究極的には学生の主体性の育成と自律的学習の習慣化を実現するために行われるものである。そのために本学では「学生レベルのアセスメント」にも力を入れ、学習ポートフォリオ「FIT-AIM」の導入や「主体性のルーブリック」の開発を通じて、学生の「自己調整学習」を促している。また、教職員による「FIT-AIM」を活用したフィードバック面談を実施した。しかしながらその必要性について学生はもとより、教職員への共有については、緒についたところであり、今後の浸透が課題である。「実践型人材」の基盤に「自己調整学習」があるとの全学認識を強め、それに向けて様々な取組みのベクトルを合わせていくことがさらに求められている。



第 4 章

資 料

資料

1. 取組広報（令和元年度分）資料

○ 第3回工大サミット パネル展示／令和元年度 大学教育再生加速プログラム テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）シンポジウム

日時：令和元年11月30日

場所：福岡工業大学（工大サミット）／立正大学（テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）シンポジウム）



2. 教育技術開発 WG 活動録（令和元年度分）

開催日	事項	議事
平成31年 4月23日（火）	第1回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 教育技術開発 WG メンバーおよび重点事項 2. H30年度第2回評価委員会開催報告 3. H31年度前期 CS 導入状況 4. 学習ポートフォリオ導入指導報告 5. 平成30年度大学改革推進等補助金実績報告書 6. 議論：授業外学習時間の捕捉方法について
令和元年 5月28日（火）	第2回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2018年度就職活動に関するアンケート結果 2. 2019年度学生 FD 活動計画案 3. 議論：授業外学修時間の捕捉方法について 4. その他 ① CS 雇用申請（前期追加分）について ② CS 活動の履歴書記載について ③ 中間評価結果の確認 ④ 第7回 AP テーマⅠ選定校協議会開催（6/14）
令和元年 6月25日（火）	第3回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2019年前期 AL 型授業実施アンケートについて 2. 期末授業アンケートでの授業外学修時間の捕捉依頼 3. FIT-AIM による授業外学修時間の状況調査について 4. FIT-AIM の活用について 5. 議論：主体性の評価について 6. その他 ① FDer 研修プログラム案内 ② 第7回 AP テーマⅠ選定校協議会参加報告（6/14）
令和元年 7月23日（火）	第4回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. FIT-AIM 前期開発内容について 2. 2019後期 CS 募集と2019前期 CS アンケート・雇用報告書について 3. 2019後期 FIT Replay 活用について（案内） 4. 議論：主体性の評価について② 5. その他 ① CS 育成のためのチェックリスト作成について ② 大学教育再生加速プログラム（AP）フォローアップに係る実施状況報告書の提出について ③ 【開催案内】ファカルティ・ディベロッパー養成講座 ④ 熊本大学公開講座 インストラクショナルデザイン入門編、応用編
令和元年 8月26日（月）	第5回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2019年度後期 CS 研修の実施について 2. FIT-AIM による授業外学修時間の状況調査結果について 3. FIT-join による学生発案型授業の実施について 4. 議論：主体性の評価について③ 5. その他 ① FDer ミーティング開催報告 ② FD AnnuALReport AL 特集号の発行について ③ AL 実施状況アンケート 回答状況

令和元年 9月24日（月）	第6回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2019年度前期 AL 型授業に関するアンケート回答結果について 2. 2019年度前期授業外学修時間について 3. 2019年度前期 FIT-AIM「授業の振り返り」利用状況について 4. 2019年度前期 FIT Replay（授業アーカイブシステム）利用状況 5. 授業アンケート「学生が実際に伸びたと実感できた力（DP要素）」経年分析結果について 6. FIT-join による学生発案型授業の実施について 7. 議論：主体性の評価と FIT-AIM 8. その他 ①2019年度前期 CS 活動まとめ ②2019年度後期 CS 一覧 ③第1回評価委員会開催報告（9/20）
令和元年 10月29日（火）	第7回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2019年度 AL 実践研究会の実施について（案） 2. FIT-AIM 後期開発内容（案）について 3. 議論：FIT-AIM の活用について 4. その他 ① CS 研修実施報告（10/2） ② FIT-join による学生発案型授業実施報告（10/9） ③『FD AnnuALReport AL 特集号』の発行について（再） ④最終報告会（仮称）開催日決定について（2020/3/17）
令和元年 12月3日（火）	第8回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2018年度卒業生アンケート調査結果について 2. 2019年度卒業生調査・企業調査等の実施について 3. 授業外学修時間調査の実施について（後期15週目授業） 4. 補助事業終了後の本取組について（案） 5. FIT-AIM 利用活性化における利用教員へのヒアリング報告～10.29『FIT-AIM』の利用活性化について』より～ 6. 議論：IR コンソーシアム学生調査による AL 型授業の成果の可視化について 7. その他 ・ AP テーマⅠ第8回選定校協議会、テーマⅠアクティブ・ラーニングシンポジウム参加報告（11/30）
令和元年 12月23日（月）	第9回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2019年後期 AL 型授業実施アンケートについて 2. 2019年度後期期末授業アンケートでの授業外学修時間の捕捉依頼 3. 2019年度後期 CS 雇用報告書と CS アンケートについて 4. 2020年度 CS 候補者募集と CS 事前研修 5. FDer の認定について 6. 『FD Annual Report AL 特集号』依頼原稿・投稿文の閲読について 7. その他 ・第9回 AL 実践研究会開催について（2/21（金）判定教授会終了後～）
令和2年 1月28日（火）	第10回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 授業外学修時間年度・期別推移について 2. 令和元年度フォローアップ報告書について 3. 議論：フォローアップ指摘事項について 4. その他 ① FIT-AIM に関する学生意見の聴取について ②『FD Annual Report AL 特集号』について ③ 3/17（火）最終報告会開催概要について ④ノートテイキングの動画について

令和2年 2月26日（水）	第11回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 後期 AL 型授業実施アンケート回答状況 2. 2020年度 CS 申請一覧 3. 2019年度 CS 合宿の実施について 4. 2020年度授業アーカイブシステム利用案内 5. 学生 FD スタッフへの FIT-AIM ヒアリング報告 6. 議論：学生 FD 活動について 7. その他 ①福岡工業大学 AP 成果報告会開催について
令和2年 3月23日（月）	第12回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	1. 2020年度後期 AL 型授業実施アンケート集計結果 2. 2020年度 FIT Replay（授業アーカイブシステム）利用状況 3. 2019年度 FIT-AIM 授業振り返り入力状況 4. 2015～2019年度授業外学修時間推移 5. 2020年度後期 CS アンケート・雇用報告書まとめ 6. 2020年度累積 GPA 学科・年次別 四分位点一覧 7. 卒業生調査（入社企業への聞き取り調査）結果報告 8. 議論：2020年度第2回評価委員会での指摘事項について 9. その他 ①2020年度第2回評価委員会開催報告（3/17） ②2020年度教育技術開発 WG メンバーについて ③2020年度「AL 型授業推進プログラム」有識者会議（仮称）について

3. AL テーマ報告会（令和元年度分）

クラス・サポーター（CS）育成のためのミーティングを行いました（5/24）

5月24日（金）本学 E 棟3階 R1教室にて、前回の合宿参加者を対象としてクラス・サポーター（以下 CS）育成のためのミーティングが行われ、CS 合宿参加者のうち14名が参加しました。

CS の育成は、本学「AL 型授業推進プログラム」（H26年度文部科学省大学教育再生加速プログラム採択事業）の取組の中で実施されており、年に1回の CS 合宿やその他のミーティングなどを通して、CS のスキルアップを図っています。

今回のミーティングの目的は、CS 活動を通して自分の成長を確認できるチェックリストを作成することであり、宮本知加子先生（FD 推進機構特任教員）の指導のもと行われました。今年3月に行われた CS 合宿において作成していた「理想の CS チェックリスト」をもとに、学生の実践を踏まえて使いやすいものへとブラッシュアップしました。



初めに宮本先生より、CS 合宿で「理想の CS チェックリスト」を作成した流れの確認がありました。CS 合宿では、アクティブ・ラーニングの困りごとについて原因分析をした後、CS に必要な資質やスキルについて話し合い、ロールプレイの実践を経て「理想の CS チェックリスト」として、4つの項目（専門知識・態度姿勢・ファシリテーション力・観察力）に分け、全体として16項目を作成しました。

今回は、以下の3つのステップでワークを進めました。

【STEP 1】チェックリストを使って、自分の活動をチェック

自らのCS活動を振り返り「理想のCSチェックリスト」にチェックを入れ、自分の活動を確認しながら、チェックリストの使いやすさを確認しました。

【STEP 2】グループディスカッション

2つのグループに分かれて、チェックリストの項目を精査するためにディスカッションを行いました。チェックリストの内容が理解しやすいように具体的な文言を考えたり、似たような項目やレベルを合わせるにはどうすればいいのかなど、和やかな雰囲気活発な意見交換が行われました。

【STEP 3】全体シェアリング

グループの代表者から精査した項目について発表し、その後全体で意見交換を行いながら項目の文言を精査しました。CSの実践を通して、力を入れている点や大事にしたいスキルが現れていました。

最後に宮本先生から、ミーティング参加への感謝とともに、学生が大切にしたいと考えているサポートについて今日の活動を通して共有できたこと、CSの思いを繋いでいくことが重要で、今後も皆さんの意見を取り入れながら一緒に進めていきたいとお話がありました。参加者にとっては、日ごろのCS活動で感じたことを共有する貴重な機会となり、とても有意義な時間となりました。



2019年度 FIT-join キックオフミーティングを開催しました（5/27）

2019年5月27日（月）FD セミナー室にて学生 FD FIT-join の2019年度キックオフミーティング

が行われ、学生10名、教員5名、職員6名の計21名が参加しました。

今回は2019年度の活動内容の確認とその内容について教職員と学生で意見交換が行われました。

まず、2019年度 FIT-join 代表の玉城 翔さん（情報工学科4年）から、今年度の FIT-join の活動として、FIT-join の役割である、教職員と学生をつなぐ活動によって本学での「学びのコミュニティづくり」を念頭に、主に3つの取り組み（授業参観&教員インタビュー、学生アンケート、Future Design 作成）を予定していることが報告されました。



これを受けて、教育技術開発 WG 長の藤岡教授から「学びのコミュニティづくり」とは具体的にどのような活動をイメージしているのか、また昨年度までの活動で課題となったことは何かなどの質問があり、玉城さんから学びのコミュニティづくりについては、FIT-join が先生と学生の間をつなぐパイプのような存在となり、両者に存在する意識のずれを埋めていきたいと考えているとの回答がありました。

また、昨年度の活動の課題として、岩橋さん（システムマネジメント学科4年）から、Future Design が教職員には好評であったが、肝心の学生に伝えきれておらず、学生向けのイベントの集客にも苦労したため、学生への働きかけがうまくいかなかったと回答がありました。藤岡先生から、今年度は企画を実施する際にターゲットをどこにするのか、どう働きかけたら良いかをより意識して取り組むようにと提案がありました。また、新たな試みとして、学生目線を生かした理想の授業をつくってみてはどうかとの提案があり、これに関連した他大学の取組の事例紹介がありました。この狙いとして、FIT-join の活動も4年目になるので、一步進んだ活動へ進むことで、学びのコミュニティづくりの新たなヒントが得られるのではないかとのご意見がありました。

最後に、FD 推進室の長谷川室長から、FIT-join の活動は先輩から後輩へと受け継がれており本学独自の学生活動として伝統になりつつあるので、その良さを引き継ぎつつ、今年度の活動に関して今日の先生方との意見交換から得られたアドバイスを参考に教職学で本学の授業改善に取り組んでいこうと FIT-join スタッフの活躍への期待が伝えられました。

第17回FD Café「自主性・自己調整学習を促すフィードバック実践」を開催しました (9/13)

9月13日（金）、「自主性・自己調整学習を促すフィードバック実践」をテーマに、第17回FD CaféをE棟R1教室にて開催いたしました。

今回のFD Caféでは、教養力育成センター長の土屋麻衣子先生（FDer）を講師とし、教職員等39名（教員20名、職員19名）が集まり、土屋先生が授業で実践されている学生の自主的学習、自己調整学習を促す形式的フィードバックの内容、方法などについての解説が行われ、自己調整学習および効果的な形式的フィードバックについて参加者で考える機会となりました。

まず、土屋先生から、自己調整学習の研究を始めたきっかけとして、本学に着任して英語の授業を実施する中で、英語に意欲がない学生が多く、なぜ動機づかないのかというデモチベーションの研究をきっかけに解決する方法はないだろうかと考えている中、6～7年研究を続けていると紹介がありました。また、教育機関における自己調整学習への関心の高まりについて、新学習指導要領（2020年より施行）における「主体的に学習に取り組む態度の評価の基本的な考え方」に、学習における「自己調整」がキーワードとされたことが紹介されました。また、アクティブ・ラーニング（以下、AL）型授業が年々増加しているが、自主的な学習時間は微増であり、やらせている能動性が高まっていることが指摘され、ALにおける主体性育成の行き詰まり感が示されました。

続いて、理論的な枠組みにおける自己調整学習とは、「学習者自身が学習プロセスに関して、メタ認知、動機付け、行動の側面において能動的に関わる学習」（アメリカの教育心理学者Zimmerman 1989）とされ、与えられた文脈で、学習者が自己調整することを想定されているので、大学・学校などの何らかの制限がある学習にあてはまりがよいと説明され、学習者の自己調整の機能は「学習者」、「環境」、「行動」の相互作用により発展し、自己調整に必要な3要素として自己効力感、目標、自己調整学習方略が挙げられました。さらに、自己調整の段階とプロセスにおいては、取り組む前の予見段階（課題の分析、自分の動機づけの確認）、遂行段階（自己コントロール、自己観察）、自己省察（自己評価、感情の確認）の3ステップを繰り返すことで成長につなげることが大切であると説明がありました。また、学生に自己調整学習を促すことを意図する際の留意点として、目標を適切なものに導く必要があること、自己効力感が低い場合には高めるサポートをする必要があること、学習方法が固定していたり限られていたり非効率な場合にはいろいろな方法や観点・視点を伝えることが必要であるとのお話がありました。

続いて、一般的にフィードバックには様々なものがあるが、今回は総括的フィードバックと形式的フィードバックの紹介がありました。総括的フィードバックは学期末の評価や資格試験の結果などであり、形式的フィードバックは学生の学習プロセスに関わり、目標までのギャップを埋め、学生の学習が向上するよう、考え方や行動を修正することを意図し、繰り返し伝えられる情報（指導ではなく）であり、目標と目標に対する現状を把握し、その達成のための方法を伝えるものであるとのお話がありました。

実際に土屋先生が形成的フィードバック（以下、FB）を実施した調査結果について報告がありました。FBを開始した週から実験群では実施ユニットの数が増え、調査前と調査後に実施したテストでも実験群の成績が大きく伸びたことが示されました。



自己調整学習の発展タイプには大きく4タイプあり、FB開始後にすぐ理解し取り組むタイプ、すぐ理解するがばらつきがあるタイプ、理解するまで時間がかかるがコツがわかれば学習するタイプ、どんなに話しても取り組まないタイプに分けられることが説明され、タイプ別に先生と学生の会話の事例が紹介されました。講演参加者は先生の会話の事例を参考にペアでロールプレイを実施し、土屋先生から形成的フィードバックは学習プロセスに関わることであり、学習へのプロセスは人によって様々であるので長い目でみることも必要であると紹介がありました。

講演後に全体での質疑応答の時間が設けられ、参加者より実際に実施した人数や時間について質問があり、土屋先生から英語のクラス人数は25～35人で、初年度は授業の中の40分を費やしたが、現在は授業の最初に10分の省察の時間を設けたり授業の前後の休み時間や学内で会った際にFBを行ったりしていると回答がありました。これに対し、1クラス50～60人の場合どのように対応したらよいかとの質問があり、土屋先生から個別の対応ができそうであれば学期の最初で行い、難しそうであれば授業の冒頭に全体で行ってはどうかとの回答がありました。

最後に、藤岡教務部長より、自学科でも初年次教育において自己調整学習の取り組みを行っているが、動機付けについては場があれば対応ができるが、行動については知識がないとうまくいかないと感じている。また、メタ認知については学生にどう考えさせるか非常に難しいと実感しており、これからのことを各自考えていくことが重要だと思う。今回のような場において引き続き教職協働で本学の学生の成長に資する教育改善の取り組みについて議論を続けたいとの感想と講師への謝辞が述べられ、予定時間いっぱいでの閉会となりました。



2019年度 新任教員 FD 研修会を開催しました (9/17)

9月17日（火）、E棟3階FDセミナー室にて、新任教員FD研修会を開催いたしました。本取組は、本学に採用後3年以内の専任教員および参加を希望する教職員を対象に、本学のFDの取組について理解を深めてもらうとともに、授業改善への意欲を高めてもらうこと、学内教員間のネットワーク作りのきっかけを得ることを目的として開催されており、今回が7回目となりました。

今回の研修会では、教職員8名（うち、新任教員3名）が参加をし、まず教務部長（教育技術開発WG長）であるシステムマネジメント学科の藤岡寛之教授より、今後の福岡工業大学の教育をどう良くしていくか、それぞれの知見を出し合いながら共有したい。また、新任教員の皆さんが着任されてから、どのような授業運営を行っているのか、その中で上手くいった点や困った点を挙げていただき、共有しながら今後の教育に活かして欲しいとお話がありました。



今回は、3名の新任教員それぞれから現在の授業内容とともに、講義で工夫していることや注意していること、また、良かった点や困っている点をプレゼンテーション形式で共有を行い、それぞれに対して意見交換を実施しました。その後、藤岡教務部長から、課題点や参考点を今後も共有しつつ、絶えず授業改善にあたって欲しいと新任教員へメッセージがありました。

次に、事務局より、ピア授業見学についての説明が行われました。授業見学は、ペアで授業を相互見学し、アドバイスをを行い、計2回実施予定で、第2回～7回授業のいずれか1回で実施後、これをフィードバックして第8回～13回のいずれかでもう1回実施することが説明されました。

総括として、村山工学部長より、先生方の授業実施の内容から、指導（スキル）レベルは申し分ないと感じたので、引き続き学生指導にあたって欲しい。自主的、主体的といったキーワードが課題であるので、新しい目で本学の教育を改善いただくよう依頼がありました。

2019年度後期クラス・サポーター（CS）研修を実施しました (10/2)

10月2日（水）、E棟3階R1教室にて、2019年度後期クラス・サポーター（CS）研修を実施し、本年度の授業科目でCSとして活動する学生29名と、教職員5名が参加しました。これは、宮本知加子先生（FD推進機構特任教員、教育技術開発WGメンバー）がファシリテーターとなり、「①CSとしての役割を再確認し、今後の活動に活かすためのヒントを得る。②CS活動を通した自ら

の学びを振り返り、自己の成長を確認する機会とする。③ CS 経験者と CS 初参加の学生の交流により、経験・知恵を共有しあう。」の3つを目的として実施したものです。例年2～3月に、新年度のCS 候補学生を対象にCS 合宿を実施していますが、昨年度より、活動年度中にCS が一堂に会して活動を振り返り、経験や考えを共有する取組として、10月初旬に後期CS 研修を実施しており、今回が2回目の実施となりました。



研修では、まず、本研修の3つの目的について説明が行われた他、本学のアクティブ・ラーニング（AL）の定義や、AL 全学展開により「実践型人材」の育成を図ること、AL をより効果的・効率的にするためにCS が期待されていることについて確認が行われました。また、CS 制度やCS 研修・養成のための取組について説明があった後、ウォーミングアップへと移りました。

ウォーミングアップでは自己紹介が行われ、本研修やCS 活動の抱負などについて、ひとことコメントが付されました。また、宮本先生と一緒に進行役を務める吉田結音さん（工学部知能機械工学科4年、2017年度より5期にわたりCS を担当）から、CS 活動の振り返りに活用するチェックリストについて、説明がありました。このチェックリストは、CS としてどのような人材を養成しようとしているのか明文化し、CS 自身の成長の機会でもあることを意識すること、また、CS 学生が自身の成長を確認するツールとして活用し、成長を実感できるようにすることを目的として作られましたが、本年3月に実施されたCS 合宿にて、宮本先生と参加学生がともに、CS によるどのようなサポートが必要かを話し合い、必要となるCS の資質を項目に分けて整理し、明文化する作業を通じて完成したものです。

CS 活動における振り返りチェックリスト

1. 前期の担当科目と担当クラスを教えてください。

担当科目	
担当学科とクラス	

2. 前期の CS 活動において、できた（できるようになった）と感じることにチェックを入れてください。

1. CS の知識を活用し、受講生の理解が深まるようなヒントを出すことができる	
2. 活動の方向性が合っているかを判断し、必要に応じて修正を促すことができる	
3. 受講生の気持ちに寄り添い、安心感を与えることができる	
4. 先生や受講生より質問し、それに応じた働きかけを行うことができる	
5. 受講生の学業となるような発表やアドバイスを望みを行うことができる	
6. 授業の後半状況を確認し、受講生が学習しやすい環境を作ることができる	
7. 学習者として模範となる行動をとることができる	

3. 上記のチェックを入れた（入れていない）理由を教えてください。

--

4. 担当の先生からご覧になって、学生の CS 活動における成長は感じられましたか。
上記の学生のチェックリストとその理由もご覧になって、コメントください。

--

ご担当：

学歴番号：

氏名

CS チェックリスト

続いて、参加学生は CS 経験者グループ（2 グループ：A・B）と本年度後期に初めて CS を担当するグループ（1 グループ：C）に分かれ、A・B グループは、CS チェックリストを使った振り返りの内容と、CS 経験からどのような力が身に付いたのかについて、C グループは、①授業の目的・CS の役割の確認、②難しいと感じたポイント、③ CS としてどのように成長していきたいかについて、グループ全員で振り返りや共有を行いました。



続いて、A・B グループは、チェックリストを活用して明らかになった課題と、それを踏まえた後期の目標を中心に、C グループは CS として今後成長したいところを中心に、グループワークでの振り返りや共有した内容について、全体発表が行われました。この中で、A・B グループからは、受講生へのアドバイスやコメントなど上手くできなかった経験やそれに対する工夫や改善点、また、今回の振り返り作業の中で、受講生中心の視点からのサポートができていなかったという気づきがあったとの発表がありました。また、C グループからは、自分たちの認識している CS の役割と、どのような力を身に付けていきたいかについて共有をしたこと、また、教養・専門科目に共通して、楽しく学べる雰囲気作り・意識作りが大切であるとの共通認識を持ったとの発表がありました。



全体発表後、宮本先生より総括が行われ、グループワークでは具体的な振り返りや共有ができ、その中で、CSの役割が共有できていると感じられたこと、また、いかに受講生の学びに繋げていけるかという視点で発表ができていたとのお話がありました。また、CS活動においては、担当の先生とのコミュニケーションが大切であり、授業の目的や先生の授業に対する考え方を理解することで、先生とCSと一緒に授業を作っていけるとのアドバイスがありました。また今後に向けて、CSは学びの促進者であると同時に、CSにとっても学びの機会であることが再確認された他、何か困ったことがあれば、いつでも相談に来て欲しいこと、皆さんにはいつでも相談できるという安心感を持ってCS活動に取り組んで欲しいとのメッセージが伝えられ、研修終了時刻となりました。本年度のCSが一堂に会した本研修は、CS同士が縦・横の連携を強めるきっかけとなり、また、担当するAL型授業をより良くするためにCS自身ができることや、CS自身の成長などについて振り返り、考えを深める場とすることができました。

学生FDスタッフFIT-joinが企画!!「Join → connect」を開催しました(10/9)

10月9日(水)、E棟3階R2にて、学生発案型授業「Join → connect」を開催し、学生17名が受講した他、教職員18名の計35名が参加しました。

学生発案型授業「Join → connect」では、学生が学びたいと思う内容について学生目線で授業をデザインし、学生の能動的な学びの意欲に応えるとともに、学生が自ら授業を企画し形にしていくなプロセスを通じ、企画立案、問題発見・解決などの経験をもとに、福工大の「学びのコミュニティ」の礎を築くことを目的としています。

初回は、『楽しい学び』とは?～クリエイティブをルーティンに!『異質なモノ』同士のコラボレーション!～をテーマとし、株式会社ふくおかフィナンシャルグループ人事統括部 人財開発センター センター長 酒口 昇(さかぐち のぼる)氏を講師としてお招きし、海外の事例を元に楽しく学ぶとはどういうことかをご講義いただき、その内容を元に学生同士でグループワークを行いました。



授業に先立って、FIT-join 代表の玉城翔さん（情報工学科4年）が FIT-join の活動紹介と今回の Join → connect の説明がありました。

授業となり、FIT-join の岩橋祐介さん（システムマネジメント学科4年）が授業の進行を担い、事前課題①あなたが考える「楽しい学び」とは何ですか？ ②最近、ニュースなどでも耳にする「多様性」＝ Diversity とは何ですか？ という問いについて学生同士で確認した上で酒口様の講義が行われました。

酒口様から、ご自身の経歴として福岡銀行に入行後、様々な部署での勤務ののち、新興国の格付けや調査のための出向でアフリカに2年間滞在したことや、シンガポール駐在での新店設置業務を経て、現在福岡フィナンシャルグループ従業員の育成企画、運営に携わっていることが紹介されました。

今回のテーマでもある「楽しく学ぶ」とは、誰のために学ぶのか、何のために学ぶのかを学生に問いかけながらお話しされました。自分のため、家族のため、幸せや成長のために学ぶことが楽しく学ぶことにつながり、それを継続するためには、「ワクワク」することが大切であるとお話がありました。さらに、「人間は変化を好むか好まないか」という問いに、一般的に人はやらされて行っていることには変化を好まないが、自分が興味を持って行っていることには、自発的、主体的に変化を好む傾向があるため、新しい発見、非日常、あこがれといった「あったらいいな！」を見つけていくことが「ワクワク」し続けるために大切だとお話がありました。振り返ると、日常は「あったらいいな」という思いからできたものであふれており、家にいながら、モノを手に入れたいたいという思いから Amazon などのネットショッピングができたり、楽に家事を済ませたいという思いから全自動洗濯機やルンバなどの便利家電ができたりしていることが紹介されました。



さらに、これからの「あったらいいな」を考える際には自分の視点だけではなく、「多様性」＝ Diversity の視点が重要であり、海外の事例（日本の常識が海外では非常識だったり、またはその逆）を視野に入れることで新しい発見や異なる課題のコラボレーションが生まれる可能性が広がるというお話がありました。

最後に、学生へのメッセージとしてポジティブシンキングでいること、少し先を見つめて、今からはじめること、自分の五感で確かめること、情熱は、大切な第一ボタンであることが伝えられました。

酒口様の講演を受けて、受講した学生は3グループに分かれ、講義を聞く前と後の考え方の変化や福工大で「楽しく学ぶ」ためにできることは何かについてディスカッションを行いました。

発表では、「講義を聞く前には気づかなかった視点や常識を常識と思うことの怖さに気づいた。」「楽しい学びとは、結果だけではなく過程も大事にする学びや、福工大ならではのモノづくり全体のプロセス（開発から販売まで）を学べる授業を通して実践的に学ぶこと」、「つながるという点では他学部他学科だけでなく他大学とコラボレーションで学べる授業などが楽しい学びにつながるのではないか。」「今日のようなイベントを継続して、コラボをして、新たな視点を発見していきたい。」との意見が発表されました。



授業実施後のアンケートでは、「物事と物事が一見、遠い存在のようにも見えるが、それが実は繋がりがあったとき、それに気づいてワクワクすることだと思いました。」「多様性の話の中で、話を聞く前は、多様性は違いのある人々が共存することだと思っていましたが、話を聞き、多様性は新たな発見を生み出すこともできるのだということに気づきました。」「自分の中の常識が覆された気がします。広い視野を持ち、社会人になってからも様々な人と触れ合い、学んでいきたいと思えることができました。」とのコメントがありました。

FIT-join メンバーでの振り返りでは、「酒口様の講義を受けて、様々な想いをもちかえった学生が多くいたことがわかり、この活動を進めていくことは、学生にとって多くのメリットがあると考えます。次回は、さらに私たちの求める『学びのコミュニティづくり』を推進できるように努力していきたいと考えています。」とのコメントがありました。

さらに、「今回の活動を通して気づいた点として、企画の楽しさ、難しさを学んだ。初めての取組で過去や現在だけでなく未来を考えるという FIT join の今後の方向性を考えることができた。反省点として、実施までのスケジュール管理や周囲を巻き込む力が不十分であった。」ことなどが挙げられました。これらの学びと反省を踏まえて、今後は新たなテーマを企画し、規模の拡大や企画の発展、また満足度の向上を目指していきたい。」と次の活動に向けての意気込みが示されました。

第18回 FD Café「チームで取り組むカリキュラムマネジメント」を開催しました (12/10)

12月2日（月）、「チームで取り組むカリキュラムマネジメント」をテーマに第18回 FD Café をE棟 R1教室にて開催いたしました。

今回の FD Café では、学びと成長しくみデザイン研究所代表で日本高等教育開発協会カリキュ

ラムコーディネーター研修講師である桑木康宏氏をお迎えし実施いたしました。教職員等23名（教員13名、職員10名）が集まり、「カリキュラムマネジメントになぜ取り組むのか」「カリキュラムマネジメントの取り組み事例」の2点について、他大学の事例を交えながらご講演いただきました。

最初のテーマである「カリキュラムマネジメントになぜ取り組むのか」について、3つのポリシーを整理する必要性として、大学を取り巻く環境の変化（入学者の変容、社会が求める人材の育成要望、認証評価に求められる学習成果の可視化）により、ディプロマポリシー（以下、DP）に基づく人材育成には順次性のあるカリキュラム設計が必須であり、チームで戦略的にカリキュラムマネジメントを進める必要があるとの説明がありました。

次に「カリキュラムマネジメントの取り組み事例」について、カリキュラムマネジメントの全体像から説明があり、大学は自ら掲げた人材育成の構想に基づいたカリキュラム設計を行い、教育活動を実施し、次にその教育活動が想定している成果に結びついているかについて測定し（学習成果の可視化）、その分析結果をカリキュラムの改善プラン策定へ繋げるというサイクルが示されました。



その上で、学力の3要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性）の育成にどのように取り組むのかについて、「カリキュラムマップ」と「カリキュラムチェックリスト」の2つの方法の説明がありました。まず、知識・技能については「カリキュラムマップ」を用い、DPを科目群や系統で区分、それを階層毎に具体化、さらに学年に合わせた科目配置を実施することで整理ができること、一方、思考力・判断力、主体性等のジェネリックスキルについては「カリキュラムチェックリスト」を用い、各科目の「教え方」を工夫することで育成を目指すことが述べられました。

最後に、カリキュラムマネジメントは最初からいきなり理想形を目指さず、まずは30点を取りに行く気持ちで踏み出すことが重要であるとの励ましがありました。

参加者を代表し藤岡教務部長より、大学を取り巻く環境として、多様な入学者については認識しており、その教育に対応すべく議論はしていたものの、社会で求められる人材育成について、大学教育における必要性を理解する良い機会となったとの感想と講師への謝辞が述べられました。

第8回 AL 実践研究会（工学部 FD 研修会）を開催しました（12/18）

12月18日（水）、「FIT-AIM の活用事例～振り返りを用いた学生の主体性評価と講義改善～」をテーマに、工学部 FD 研修会（第8回 AL 実践研究会）を E 棟 2F 会議室にて開催いたしました。

今回の工学部 FD 研修会（第8回 AL 実践研究会）では、電気工学科の北崎 訓先生を講師とし、教職員等43名（教員30名、職員13名）が集まり、学習ポートフォリオ（FIT-AIM）の活用についての実践例の紹介が行われました。

まず、着任当初より授業改善の一環として、学生にアンケートを行い、授業中にてフィードバックを行ってきたが、今年度から FIT-AIM を活用し、学生に毎回の講義の振り返りを行わせていることが紹介されました。FIT-AIM を活用し始めた理由として、従来から行っていた中間アンケートは紙媒体で確実に回答を回収できるが、集計や分析に時間がかかること、期中に学生のコメントを把握するのが1回になることから、各回毎に集計表示される FIT-AIM による振り返りに取り組んだことが述べられました。

実際の活用事例として、主に1年生を対象に毎回の講義で学生に期限を設けて授業の振り返りを促し、内容に応じてフィードバックを行うようにしたこと、利用率を上げるために課題とテストは FIT-AIM で返却していること、4段階評価での理解度把握、取り組み姿勢の把握に活用していることが紹介されました。さらに他の学生の回答状況を伝えることによって学生自身の理解度を認識させるように工夫したことが報告されました。得られたデータは学生の記入率などをエクセルで作成、管理しており、4段階の評価とコメントに着目したところ、同じ1年生でも文章の質が違うことが見えたため、コメントを数値化できるグーグルの機械学習を利用してコメントから感情分析を行った例が紹介されました。

これらの結果データから、入試種別で見ると点数と回答率では入試種別で差はなく、むしろ3教科型入試のばらつきが目立つこと、きちんと回答する学生ほど点数が高いという相関がみられたこと、理解と姿勢の平均では大きなばらつきはないが、姿勢については学生によって4段階の解釈が異なっていることが報告されました。また、回答率が高い学生の姿勢が高いかについては今の段階では相関がみえず、点数が高い学生の理解と姿勢の相関までは見えたことが報告されました。



講演後に全体での質疑応答が行われました。参加者から、「FIT-AIM を成績評価に反映させてい

るとのことだが、具体的にはどのように行っていますか。」と質問があり、北崎先生から「次の授業日の17時までの期限内に回答した場合のみ10%反映させている。回答した学生だけ答案の開示をしているので、答案を見たいという学生の心理に働きかけ、7割以上は答えています。」との回答がありました。また、参加者から「自分の講義でも振り返りをさせているが、結果との乖離があるときにどうすべきか、どのように対応していますか。」との質問があり、北崎先生から「まずは個別で学生本人に自覚させる機会を設けています。」との回答がありました。そのほか、FIT-AIMに記載された内容を元に教員間での連携ができると良いのではないかと、自分の授業ではまだ使っていないが波及効果で FIT-AIM を使っている学生がいる、とのコメントがありました。

最後に、村山工学部長から北崎先生へ謝辞が述べられ、盛況のうちに閉会となりました。

「FIT 学生団体サミット」を開催しました（2/5）

2月5日（水）、E棟3階R2にて、FIT 学生団体サミットを開催し、4団体に所属している学生23名が参加しました。

FIT 学生団体サミットは学内で学生が自ら運営する団体（FIT-join、FIT 隊、学生自治会、FIT 女子会）に属している学生がお互いの活動を共有、理解し、学内における授業や環境などに関する課題や解決策を学生同士で話し合う機会を設け、今後の各団体や個人の活動の進展につなげることを目的として今回初めて開催するものです。第1回は「魅力的な大学とは？」というテーマで福工大の魅力や課題を考え、その維持・向上や改善のために学生同士でできることを考えました。開会にあたって、進行を務める FIT-join 代表の玉城翔さん（情報工学科4年）が開催の趣旨及び、みんなで交流を深めていきたいという決意を述べました。



まず、FD 推進室の長谷川室長から、「今回の取組は学内4団体で行う初めての取組であり貴重な機会であること、みなさんが所属している団体での活動を共有し、横のつながりを強化してほしいと思っています。サミットで得た新たな気付きを自身の活動にも生かし、個人としても組織としても付加価値を身につけるようなサミットになることを期待しています。」と挨拶がありました。

続いて、各団体の活動紹介が行われました。4団体が活動している目的や内容、組織体制や、年間スケジュールについて報告がありました。



ワークショップでは、「魅力的な大学とは？」というテーマでグループディスカッションを行いました。1グループ約5名のグループ（各団体の混成）で、まずは自己紹介を行い、福工大の魅力と課題について自分の考えをまとめ、グループで共有するワークを行いました。



各グループでの発表では、福工大の魅力として「施設や学習環境が充実している」、「学びへのサポートが手厚い」ことが挙げられ、課題としては、「情報系大学にも関わらず学内で IC カードが使えない」ことが挙げられました。また、「友人関係が学科で閉じてしまい、学生同士が交流する機会が少ない」との課題に対しては、「学科間のつながりを深めるための学科横断の授業の開講や共通の実験室（講義室）の設置」などの解決策が提起されました。ワークショップ後にはお互いをより知るためのインタビューゲームやワークとは違うメンバーで今日の振り返りを行う交流会を実施しました。

サミット閉会にあたり、玉城さんから、「自分が所属している FIT-join（学生 FD）では授業改善という視点で活動をしているが、施設や環境といった違う視点で大学の魅力や課題を考えるきっかけができました。今日の気づきを各団体の今後の活動や団体間での交流に活かしていきましょう。」と感想が述べられました。

実施後のアンケートでは、「このサミットに参加して、他団体が具体的にどのような活動をしているのかわかった」、「グループワークを通していろんな視点からの意見がもらえた」、「自大学の魅力を発見できた」、「他団体の活動を聞いてやってみたい活動が見つかった」などのコメントがあ

りました。また、全体の感想として、「普段接することのないメンバーと話すことができてとても楽しかった」「お互いを知る中で今後は組織の課題などについて議論してみたい」「学生交流といった点を重視していきたい」「継続的にサミットを開催したい」とのコメントがありました。

今回の企画を検討した各団体のリーダーの振り返りでは、「お互いの活動を共有、理解するといった目的は果たせたと思うが、運営面では実施にあたっての準備が不十分であった」「学生同士の交流によって新しい気付きがあった」「ここでとどまらず、次は各団体でコラボして解決できることなどについて検討していきたい」と次の活動への意気込みが感じられました。



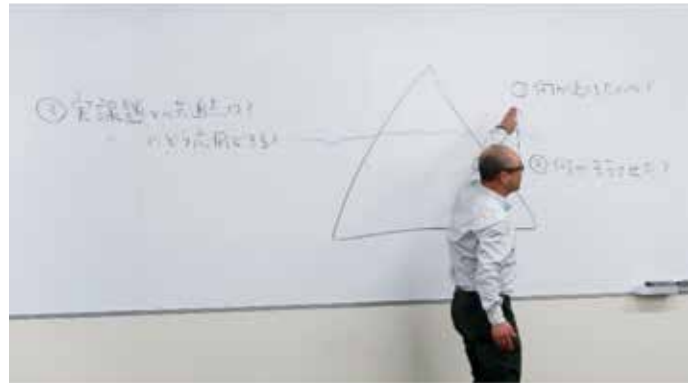
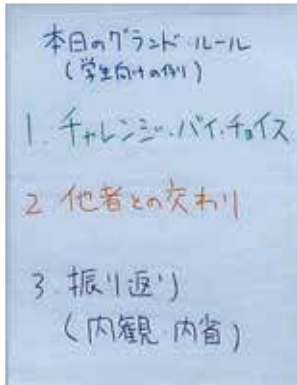
第9回 AL 実践研究会を開催しました（2/21）

2020年2月21日（金）、「アイスブレイキングとチームビルディング」をテーマに第9回 AL 実践研究会を本学 E 棟 R1 教室にて開催しました。

AL 実践研究会は、授業での実践事例やその成果について、教員間の情報共有の場として実施されているものです。今回は、教養力育成センターの榎崎兼司先生を講師とし、教職員等21名（教員13名、職員8名）が集まり、ウェルネス科目での教育手法を事例に、講義の中で活用できる「場づくり」の Tips と活用例について学ぶ機会となりました。

榎崎先生から、授業の導入時や PBL を含むアクティブラーニング実践の際に有用であると考えられる、アイスブレイキングやチームビルディングについては、グループワークの手前のところで場が凍っている状態、学生がリーダーシップやフォロワーシップを発揮する前の状態において、体を動かす中で、場や敷居の壁を下げる効果があること、さらにソーシャルスキルを実感することがねらいであることの説明がありました。その上で、授業で使用しているグラドルールが紹介されました。

- ①「チャレンジ・バイ・チョイス」自分でコンフォートゾーンを脱するチャレンジ目標を持つ
- ②「他者と交わる」他者と協調し他の意見を取り込む。正解や間違いはないことを理解する。
- ③「振り返り（内観・内省）」何が起こったのか、何がそうさせたのか、実課題に応用できるかの視点で振り返る。



まず、アイスブレイキング2種類（ホッパー、カタルタ）を体験しました。ホッパー（チューブ型浮き輪を小さく切ったもの）は、2人1組で同時にホップ（弾く）＆キャッチすることで、軽く体をほぐし楽しい雰囲気づくりをねらいとしたワークです。狙った方向にホッパーが飛ばずに、自然と身体の動きと会話が発生し、チームでの一体感を感じました。また、カタルタは自己紹介やディスカッション、ブレインストーミングをねらいとしたもので、「カタルタ」というカードに書かれた接続詞に従って、即興で自己紹介を考えることで、形式的になりがちな自己紹介に変化を持たせる効果を感じました。



続いて、チームビルディングとして、ボールを用いたアクティビティを行いました。これは未知の課題に対してチームでの解決を試みる経験を通して、プロジェクトワークについての気づきを得ることをねらいとします。2チームに分かれ、フリースボールを全員の手にとどり着くまでの時間を競うというシンプルなワークですが、改善を重ねた結果、回を増すごとに時間を短縮することができました。このワークを通して、①何が起きたのか？②何がそうさせたのか？③実課題との共通点は？また、実課題にどのように応用できるのか？についてチームで振り返りました。

総括として檣崎先生から、今回のアクティビティでの「トライ&エラー」を通して、他者を理解し配慮しながら、課題と対策を繰り返すものであり、プロジェクトワークに必要な場づくりや他者とのやり取りの気づきをねらいとしたことが述べられました。また、これらのアクティビティと実課題（授業での演習やプロジェクト）との違いとして、ソーシャルスキルに加えて、実課題に取り組むための知識やスキルが土台として必要であることの説明がありました。



質疑応答では、ワークに入れず固まってしまう学生への対応について、「チャレンジ・バイ・チョイス」で学生自身にどこまでチャレンジするかを委ねること、たとえ発表できなくても選ばせるだけでもその子にとってのチャレンジであり、結果として言動が変わることもあると述べられました。また、チャレンジ目標が非現実的な（高すぎる or 低すぎる）学生の対応については、チャレンジゾーンの意味を先に伝え、チャレンジの意義を学生が理解することが重要であることが示されました。

最後に、藤岡教務部長より、今回のアクティビティを本学の1年生全員が体験しているということを我々はどう生かすか、また今回の気づきを参加者個人に留めず、周りに広げていく意義と役割があることが述べられました。謝辞とともに、今年度で補助期間が終了するAL型授業推進プログラムの引き続きの協力依頼があり、予定時間いっぱいでの閉会となりました。

文部科学省 大学教育再生加速プログラム（テーマⅠ）

**福岡工業大学
AL 型授業推進プログラム
平成26～令和元年度 事業報告書**

令和2年3月発行

〔編集・発行〕

福岡工業大学

FD 推進機構 FD 推進室

〒811-0295 福岡市東区和白東3-30-1

電話 092-606-7370

Fax 092-606-7379

<http://www.fit.ac.jp/ap>

Email o-fd@fit.ac.jp

